

名古屋大学大学院
人文学研究科 人文学専攻

2023 年度
中日本自動車短期大学
日本語教育実習報告書

実習生(50音順): 王嫻、王肖、王妥妮、

宋幹秘、翟首藝、杜保娣、範俊梓

担当教員: 鷺見幸美

目次

1. 実習の概要.....	4
1. 1 実習参加者と担当教員	4
1. 2 実習の内容	4
1. 3 実習の流れ	6
1. 4 実習の特徴	7
1. 5 実習の期間とスケジュール.....	8
2. 事前準備.....	10
2. 1 教案作成の練習	10
2. 2 実習先の決定	11
2. 3 実習内容の決定	11
2. 4 復習テストの内容と実施方法.....	11
3. 授業見学.....	12
3. 1 初回授業見学（4月13日）	12
3. 2 1回目の実習前後の見学.....	13
3. 2. 1 NAC 教師の授業の見学	13
3. 2. 2 実習生の授業の見学.....	13
3. 3 2回目の実習前後の見学.....	14
3. 3. 1 NAC 教師の授業の見学	14
3. 3. 2 実習生の授業の見学.....	14
3. 4 見学から学んだこと	15
3. 4. 1 王嫫	15
3. 4. 2 王肖	16
3. 4. 3 王妥妮	17
3. 4. 4 宋幹秘	17
3. 4. 5 翟首藝	18
3. 4. 6 杜保娣	19
3. 4. 7 範俊梓	19
4. 実習経過.....	20
4. 1 授業準備.....	20
4. 2 授業の流れ	21
4. 3 それぞれの授業状況と振り返り	22

4. 3. 1 王嫺	22
4. 3. 2 王肖	26
4. 3. 3 王妥妮	30
4. 3. 4 宋幹秘	35
4. 3. 5 翟首藝	38
4. 4. 6 杜保娣	44
4. 3. 6 範俊梓	49
5. 授業評価	53
5. 1 アンケートの作成	53
5. 3 アンケートの結果	54
5. 4 振り返り	59
6. 授業感想	60
6. 1 王嫺	60
6. 2 王肖	61
6. 3 王妥妮	62
6. 4 宋幹秘	63
6. 5 翟首藝	64
6. 6 杜保娣	65
6. 7 範俊梓	66
別表	68
アンケート	68

中日本自動車短期大学での日本語教育実習

日本語教育学分野前期課程 2 年

王嫻、王肖、王妥妮、宋幹秘、翟首藝、杜保娣、範俊梓

第 1 部では、2023 年度中日本自動車短期大学(略称:NAC)での日本語教育実習について報告する。第 1 章では、実習の概要を紹介する。第 2 章では、実習の事前準備について述べる。第 3 章では、NAC での授業見学の経験を記録する。第 4 章では、実習経過の詳細について記述する、第 5 章では、学習者アンケートを実施した結果について分析し、実習を振り返る。第 6 章では、各実習生の感想を記述する。

1. 実習の概要

1. 1 実習参加者と担当教員

実習参加者は名古屋大学人文学研究科・人文学専攻・日本語教育分野博士前期課程 2 年生の学生である。合計 7 名であり、それぞれ王嫻、王肖、王妥妮、宋幹秘、翟首藝、杜保娣、範俊梓である。

指導教員は名古屋大学人文学研究科・准教授の鷲見幸美先生である。なお、実習の TA(ティーチング・アシスタント)として、名古屋大学人文学研究科・人文学専攻・日本語教育学分野博士後期課程 1 年生の陳釗穎先輩にご協力を頂いた。

NAC の実習生担当教員の古川竜治先生、及び清水恵美先生にご協力を頂いた。古川先生には受入教員として、授業実践のためのご指導だけでなく、実習開始前から終了後まで、多大なるご協力を賜った。清水先生は、毎週の授業見学を快く受け入れてくださった上、実習生の授業実践に貴重なアドバイスをくださった。

1. 2 実習の内容

実習の内容は、NAC の留学生を対象に、週に 1 回日本語の授業を対面で行うことである。実習の詳細を以下の通りである。

授業の対象は主に NAC 留学生別科に所属する学生、7 名である。NAC は自動車の機能や構造に興味を持ち、自動車整備士を目指す人のための短期大学であり、一般教育科目、

外国語科目、保健体育科目及びキャリア開発科目を配置している。留学生別科は、NAC 本科へ進学を希望する留学生を対象に、日本語の教育を行い、本科に必要な自動車に関する用語などを補強するために設置されている。なお、7 名の別科正規生の他、近隣に住んでいる日本語を勉強したい学生も 1 名含まれていた。実習の対象者は合計 8 名である。他に、10 月から正式に日本語授業に出席する学生が 1 名、聴講生として途中参加した。聴講生を除く 8 名の内訳は、男性 7 名、女性 1 名である。国籍は中国(7 名)、スリランカ(1 名)である。新学期開始時の平均日本語レベルは N5 合格である。

実習のクラスは、2023 年度春学期初中級のクラスであり、使用した教材は以下の通りである。『できる日本語 初中級 わたしのことばノート』（アルク）と『できる日本語 初中級 わたしの文法ノート』（アルク）(それぞれの略称:『ことばノート』と『文法ノート』)である。この二冊は、『できる日本語 初中級 本冊』の補助教材として作られたものであり、『本冊』で学習する語彙や文法を整理・復習・応用することに使う教材である。

なお、実習生が作成した小テストとスライドショーも教材として使用した。テストは、前の週の授業で復習した語彙と文法に絞って出題する。時間は 10 分であり、分量の目安は A42 ページ（一枚に両面印刷して使用）である。スライドショーは、教科書の練習問題の解答例の提示を中心に、内容によって写真や実習生成成の練習問題などを入れた。

授業時間は毎週木曜日の午後 3 限目(『ことばノート』の授業：13:30～14:00、『文法ノート』の授業:13:30～14:30)である。

留学生クラスの時間割とクラス編成、担当していた学期のカリキュラムの詳細は以下の通りである。

表 2 2023 年度春学期【別科時間割】授業詳細

初中級					
	月	火	水	木	金
1	課テスト(先週分)	会話内容導入 (場面理解) (翌日分ことばテスト)	できる 1 前半	できる 2 前半	『文法ノート』 (「ポイントチェック」、「水やり」、「花」の頁を中心に) 本冊 : 話読聞書
2	新出語導入(今週分)	会話内容導入 (場面理解)	できる 1 後半	できる 2 後半	
3	文型トレーニング	ゼミ 会話テスト	前々週の復習 (翌日分ことばテスト)	《古川・実習生》『ことばノート』	

4	TRY N4 聴解 (学習帳の わくわく 99 を 中心に、聴解タ スク 25・易しい 日本語の聴解 トレーニング 随時使用)	こころカード 小説	前々週の復習 テスト ことば短文	『文法ノート』 (できる 1 の み。できる 2 は 授業中) 前課の 『ことばノー ト』・『文法ノ ート』の復習テ スト	
---	--	--------------	------------------------	--	--

1. 3 実習の流れ

日本語教育実習全体の流れは以下の表 1 のように示す。

表 1 日本語教育実習全体の流れ

2022 年 10 月	日本語教育基礎実習Ⅱの授業で、実習先について検討し、実習先を 2ヶ所に絞った。
2022 年 10 月 7 日	鷺見先生は NAC の担当教員古川先生から、基本的に全員の実習受け入れが可能であるとのことのお返事をもらった。
2022 年 10 月～2023 年 1 月	鷺見先生と NAC の担当教員古川先生との間で、実習生の担当する授業が決められた。
2023 年 1 月 25 日	日本語教育基礎実習Ⅱの授業で、実習の授業担当日を決めた。
2023 年 2 月 27 日 午前 9 : 30	オンラインで、NAC の別科講師会議に参加した。(別科教員が全員集まり、教員のみで打ち合わせを行った)
2023 年 4 月 12 日	日本語教育基礎実習Ⅲの授業で、実習開始前の確認を行った。
2023 年 4 月 13 日	実習生 7 名と先輩王淋萱 1 名、合計 8 名全員 NAC に行った。古川先生から NAC のキャンパスを案内してもらった。午後、古川先生の 3 限・4 限授業を見学した。その後、見学の振り返りを TACT のフォーラムに共有した。)

2023年4月20日～6月8日	毎週木曜日に、全員1名ずつ1回目の授業を担当した。 (木曜日午後の授業は、実習生が古川先生とベきになって担当した。実習生は1回の授業で、「ことばノート」か「文法ノート」のいずれかを担当した(表3を参照) 授業後、授業担当日の翌日正午までにTACTのフォーラムに実習の振り返りを書き込んだ。 見学者は午前中に、清水先生の授業を見学した。午後、3・4限の見学者が実習生の授業を撮影した。授業後、見学の翌日正午までにTACTのフォーラムに実習の見学の感想や担当者へのコメントを書き込んだ)
2023年6月14日	日本語教育基礎実習Ⅲの授業で、(第1回目の授業の振り返りを行い、2回目の授業に向けて注意や課題を共有した。)
2023年6月15日～7月27日	毎週木曜日に、全員1名ずつ二回目の授業を担当した。実習生は、「ことばノート」か「文法ノート」のいずれか、担当しなかった方を担当した。)
2023年7月27日	最終回の授業、及び最後の挨拶をした。
2023年8月2日	日本語教育実習Ⅲの授業で、実習後の振り返りと総括を行った。
2023年8月中旬	「実習報告書」をTAの陳釗穎先輩に「中間チェック」をしてもらった。
2023年8月31日	「表紙・目次・第1部・第2部」をまとめ、実習報告書第1稿を完成した。
2023年9月30日	鷺見先生のフィードバックをもらって、実習報告書第2稿を完成させた。

教育学支援システム(TACT)の講義サイト「日本語教育実習Ⅲ」のフォーラムについて: 見学者は当日の感想、参考になったことやその日に得た学習者の情報を共有したり、授業担当者は授業の反省など書き込んだりしたものである。「課題」、「学生の様子」、「復習テスト」、「相談」、「授業担当」、「見学」という6つのトピックが含まれる。

1. 4 実習の特徴

①この実習の最大の特徴は、実習生が7名と多く、全員女性で、母語が中国語だったことである。昨年度のNAC実習より少なく、2回であった。

②背景: コロナはそんなに厳しくないため、マスク脱着で授業を行った。

- ③別科のカリキュラムに沿って、指定された教科書を使って授業を行った。
- ④使用言語：中国人多かったが、スリランカ1名いったため、日本語のみで授業を行った。
- ⑤担当1回目はその前の週の午前の清水先生の授業、担当2回目は自分の授業の午前中の清水先生の授業を見学した。いずれも見学記録を残した。
- ⑥授業担当は木曜日午後の復習授業を古川先生とペアで実習した。そのうち1回は『ことばノート』、1回は『文法ノート』を担当した。3・4限の見学者が実習生の授業を撮影した。パフォーマンスを振り返るために、授業は全て録画した。動画を見て、授業の振り返りをした。
- ⑦授業の設備について：NACのコンピューターや投影設備が完備されている。授業ではスライドショーなどの教材も使用した。そして、実習用の三脚とビデオカメラを設置し、毎週カメラによる動画の共有が必要なため、三脚のみNACの別科生の教室に置かせてもらった。見学者は見学する際に、授業動画の撮影を担当した。
- ⑧学習者アンケートについて：全体で学習者アンケートを作成し、アンケートを実施した。実習生は2回目（8月15日）以降は、授業終了時に各自でアンケートを実施し、合計7回だった。
- ⑨復習テストの渡す形式について：第1課も含めて、全課の復習テストを作成した。第2課以降は、その課を担当した実習生が作成し、実施は、翌週の担当者に託した。（例えば、「2課を担当した人が2課のことばノート・文法ノートからテストを作成して、次の3課の人に託す」ということである。翌週の実施者は、それをプリントアウトして中日本短大に持参し、向こうで学生8名＋古川先生の方で9枚印刷して配布した。）

1. 5 実習の期間とスケジュール

実習の期間とスケジュール：約4ヶ月間にわたって週に1回行った。

実習期間：2023年4月13日—2023年7月27日

実習期間での授業のスケジュールは以下に示した表3の通りである。

表3 実習計画

日付	テーマ	担当内容	授業見学	
		3・4限	1・2限	3・4限
4月13日	第1課「新しい一歩」	古川先生	8名(全員 +王淋萱)	8名 (全員 +)

				王 淋 萱)
4月20日	第2課「楽しいショッピング」	①『ことばノート』杜保娣	② + 王淋 萱	②
4月27日	第3課「私の目標」	②『文法ノート』範俊梓	③ + 王淋 萱	③
5月11日	第4課「住んでいる町」	③『ことばノート』翟首藝	④	④
5月18日	第5課「大変な1日」	④『文法ノート』 王肖	⑤	⑤
5月25日	第6課「旅行に行こう」	⑤『ことばノート』宋幹秘	⑥	⑥
6月1日	第7課「西川さんの家へ」	⑥『文法ノート』 王妥妮	⑦	⑦
6月8日	第8課「ありがとう」	⑦『ことばノート』王嫻		①
6月15日	第9課「アルバイト先で」	①『文法ノート』 杜保娣	①	②
6月22日	第10課「旅行に行って」	②『ことばノート』王肖	②	③
6月29日	第11課「地域社会の中で」	③『文法ノート』 王嫻	③	④
7月6日	第12課「私の健康法」	④『ことばノート』範俊梓	④	⑤
7月13日	第13課「親の気持ち・ 子供の気持ち」	⑤『文法ノート』 宋幹秘	⑤	⑥
7月20日	第14課「イベント・行 事」	⑥『ことばノート』王妥妮	⑥	⑦
7月27日	第15課「気になるニュー ース」	⑦『文法ノート』 翟首藝	⑦①	①

①～⑦、①～⑦に一人の名前が入る。①=①ではなく、前半と後半で担当順は異なる。前半で「文法」を担当したら後半で「ことば」、前半で「ことば」を担当したら後半で「文法」を担当する。

1.2限は清水先生の授業であり、3.4限は授業担当者と古川先生の授業である。表4は第2巡目のスケジュールである。自分の担当する前の週の午前の清水先生の授業を見学したかった追加見学者がいるため、2巡目のスケジュールを以下の表4に変更した。

表4 実際の実習スケジュール

6月15日	第9課	①『文法ノート』杜保娣	①②	②
6月22日	第10課	②『ことばノート』王肖	②	③
6月29日	第11課	③『文法ノート』王嫻	③	④
7月6日	第12課	④『ことばノート』範俊梓	④⑤	⑤
7月13日	第13課	⑤『文法ノート』宋幹秘	⑤⑥	⑥
7月20日	第14課	⑥『ことばノート』王妥妮	⑥	⑦
7月27日	第15課	⑦『文法ノート』翟首藝	⑦①	①
8月2日	振り返り			

2. 事前準備

中日本自動車短期大学で日本語教育実習を実施することに先立て、様々な準備活動が行われた。まず2022年秋学期の「日本語教育実習II」において、教案作成の練習と模擬授業の実施が行われた。続いて、2023年の春休みには、実習生7名と鷺見先生及び実習先の先生方との事前の打ち合わせが行われた。その後、2023年春学期の「日本語教育実習III」において、授業で使う教案の作成と実際の日本語教育実習が行われた。以下、具体的な準備過程を報告する。

2. 1 教案作成の練習

2022年秋学期の「日本語教育実習II」において、『文法ノート』と『ことばノート』を中心に教案作成の練習をした。前者は『できる日本語 初中級 本冊』の学習項目のうち、文型を中心にした副教材で、後者は語彙を中心にした副教材である。

授業で、実習生がいくつかのグループに分けられ、それぞれのグループが『文法ノート』または『ことばノート』の一課を担当した。各グループ内では、まず相談を重ね、担当する課の教案を1週間かけて作成した。次の週では、鷺見先生やほかの実習生の前で教案の内容を発表し、アドバイスをもらった。受けたアドバイスをもとに、教案を修正した。

教案の修正が終わったら、鷺見先生とほかの実習生の前で模擬授業を行った。単に教案の内容を読み上げるだけではなく、ほかの実習生を実際の学生として捉え、やりとりをしながら授業を進めた。授業に必要な教具を自分で作ったり、授業内容に関連する実物を持ち込んだりして、実習生たちはできる限り本番の授業を想定して、授業を行った。その結

果、教案や授業の進行についてだけでなく、授業のリズムや展開の仕方について様々な貴重なアドバイスを受けることができ、非常に有益な経験となった。

2. 2 実習先の決定

実習先は実習生に自ら決めてもらうこととなっている。例年の先輩方のご紹介や担当教員である鷺見先生のご協力により、実習生は例年の実習先である中日本自動車短期大学または上海外国語大学で実習を行うことが可能であった。2022年秋学期当時、新型コロナウイルスの収束がまだ見えなかったため、上海外国語大学における実習はオンラインの形で行われる可能性が高かった。一方で、中日本自動車短期大学での実習は対面で行われる見込みであった。オンライン授業の効果を懸念し、実習生全員(計7名)は中日本自動車短期大学での実習を選択した。

実習生の人数が例年より多かったため、鷺見先生は事前に中日本自動車短期大学の古川先生にメールで打診してくれた。幸いなことに、古川先生は快諾してくれて、実習生全員を受け入れることができることとなった。

2. 3 実習内容の決定

2022年2月27日に、実習生全員は古川先生のご招待より講師会議に参加した。講師会議で、古川先生は2023年度春学期における留学生別科の授業の時間割、『できる日本語初中級 本冊』の授業日程、そして留学生別科の学生に関する情報を紹介してくれた。また、講師会議において、実習生が『できる日本語初中級 本冊』の内容の復習として、『ことばノート』および『文法ノート』を用いた授業を担当することも確定した。

2. 4 復習テストの内容と実施方法

実習を行うことに加え、自分が担当した『ことばノート』・『文法ノート』の内容の復習テストを作成するタスクがあった。復習テストの内容については、鷺見先生を通じて古川先生に連絡し、2023年春学期の最初の授業でその内容を確定した。このテストは、学習内容の定着と効果の確認を目的とした10分程度で完成できる練習問題であり、各課のもっとも重要な学習項目をカバーすることを目指していた。

復習テストの実施は以下のような手順に沿って行われた。自分の担当した課の復習テストが完成したら、事前に印刷し、翌週の授業を担当する実習生に託す。翌週の授業を担当する実習生は実習当日に中日本自動車短期大学に持参し、学生に配布し、回収する。回収

したテストを持ち帰り、その課を担当してテストを作成した実習生に渡す。受け取った実習生はテストを採点し、得点を記録する。採点が終わったら、得点表に記録し、翌週担当の実習生に採点済みのテストを渡す。

復習テストの実施によって、学生の学習項目に対する理解度を確認し、学習効果を向上させることが期待されていた。

3. 授業見学

今回の日本語教育実習では、授業を正式に3回見学させて頂いた。1回目は実習が始まる前に、全体的な見学(4月13日)があった。当日の午後は古川先生の授業である。その日の授業内容は、『できる日本語』の初中級第一課の『ことばノート』と『文法ノート』である。2回目は、初回実習の前後である。各実習生の実習担当日の前の週の3限の実習生の授業と4限の古川先生の授業である。また、2回目の見学では実習日当日の1限2限の清水先生の授業を見学するのも必須である。3回目は、終回実習の前後である。各実習生の実習担当日の前の週の3限の実習生の授業と、4限の古川先生の授業である。そのうち、当日朝1限、2限の清水先生の授業の見学は必須ではないが、時間に余裕があって見学した実習生もいた。今学期の実習生は7名いるため、各実習生は2回の実習機会を頂いた。そのために、各実習生はNACの先生の授業だけでなく、実習生の授業を見学することもできた。実習生の授業を合計、2回見学することができた。2回とも自分が担当する前の週の実習生の授業である。見学する際に、授業動画の撮影も担当した。

3. 1 初回授業見学（4月13日）

初回見学は実習生全体的見学である。実習生全体は名古屋大学で集合し、名古屋大学駅から出発した。新鵜沼駅まで電車で行った。当日、実習用の撮影道具（三脚、カメラ）も持っていった。毎週カメラによる動画の共有が必要なため、三脚のみNACの別科生の教室に置かせてもらった。

NACは新鵜沼駅と短大キャンパスの間にバスを運営している。平日には新鵜沼駅発のバスが1日3回運行されていた。初日に朝早く電車で新鵜沼駅に到着し、8:55発のバスに乗り、9時20分前後にキャンパスに到着した。約束した場所で古川先生に会い、挨拶してから、非常勤講師室や別科の教室までのルートなどを案内して頂いた。そして、教室に入り、清水先生と学生の皆さんに紹介して頂いた。その後、古川先生の授業を見学した。古川先生が担当していたのは『できる日本語 初中級 本冊』毎課の復習の授業『ことばノ

ート』と『文法ノート』である。当日、古川先生は第一課の復習授業であった。初回見学の日に見学できなかった実習生もいるため、この日の授業の撮影もした。

見学後、挨拶が終わったら、各実習生はスクールバスで新鶴沼駅まで乗って、新鶴沼駅から電車で帰った。帰った後、各実習生はオンライン会議で、古川先生から頂いた資料をもとに、今学期の授業で使用するマルチメディアや資料などの統一の様式（詳細は添付資料を参照）を決めた。授業動画も帰宅後、OneDrive で共有した。その上で、各実習生はその日のうちに名古屋大学の専用メールボックスに見学の感想を共有し、交流した。

3. 2 1 回目の実習前後の見学

3. 2. 1 NAC 教師の授業の見学

初回の見学が終わり、第 2 週から実習生の授業が始まった。初回とは違い、2 回目の見学は全体的な見学でなく、個人の見学である。実習生が 1 回目の授業を行う前に、担当する実習日の前の週の古川先生の授業と実習生の授業を見学した。古川先生は、実習生と交替で、『ことばノート』と『文法ノート』の復習の授業をされた。

本来は『ことばノート』を使った復習のあと、『文法ノート』を使った復習をすることになっていたが、第 2 週の実習生が行った授業の様子から、時間が足りなくなる恐れがあるとの判断から、第 3 週から実習生は 3 限で授業を行ったほうが良いという意見を古川先生から頂いた。そのため、3 週目の実習生から、『ことばノート』『文法ノート』を問わず、授業を 3 限で行うことになった。

2 回目は、実習日の前の週の木曜日にある 3 限の実習生の授業と四限の古川先生の授業を見学した。最初の実習生（杜）は、2 週目に授業を行うために、初回に見学しただけで、1 回目の授業を行った。初めての 1 人の見学であり、緊張しながら、動画の撮影をした実習生もいたし、ビデオカメラの操作を上手く行った実習生もいた。また、講義サイトでの実習生間の情報の共有を見逃し、カメラのメモリーの空き容量を確保せず、カメラのメモリーが足りなくなってしまって撮影ができず、代わりにスマートフォンで撮影することもあった。不注意により、撮影がされなかった授業もあった。

3. 2. 2 実習生の授業の見学

実習生の授業は 3 限目であり、見学する際に、授業の様子や学習者の様子を見ながら、動画の撮影もしなければならない。実習生の授業が終わったら、現場で意見やコメントなどを交流することもあった。見学後、金曜日までに、見学の動画を共有した。動画の共有が

初めてだったこともあり、初回は、操作がうまくできない実習生もいたが、実習生たち即時に交流し解決した。2 回目の経験にもなった。動画を共有した上で、見学者は当日の感想やその日に得た学習者の情報を TACT のフォーラムを用い、共有した。その日に、実習者以外の目線から見た授業や学習者の状態なども違いがあり、その場で実習生の間で交流することができた。それにより、他の実習生は授業実践のヒントを得たり、学習者の情報を授業に生かしたりすることができた。

3. 3 2 回目の実習前後の見学

3. 3. 1 NAC 教師の授業の見学

6 月 8 日の授業をもって、実習生全員 1 回目授業の授業が終わった。その後、2 回目の授業が始まった。実習生の授業内容は、前回と違っていたため（例えば、1 回目の実習は『文法ノート』だと、2 回目の実習は『ことばノート』になる）、1 回目の実習と同様に、2 回目の実習を実施する前に、古川先生と清水先生の授業の見学があった。

時間的には、前回の見学と少し違っていた。

自分担当の前の週の古川先生の授業（木曜日 4 限）を見学した。自分の準備している授業内容（『ことばノート』か『文法ノート』か）と同じものを実施していたため、授業の流れと説明のやり方など、大変勉強になった。実習生たちは、古川先生の授業を参考に、自分の授業の流れを改善したり、言い方などを注意したりして、教案を修正した。

清水先生の授業見学は、実習日当日の朝（木曜日朝 1 限と 2 限）になった。実習生は復習の授業をするため、導入の授業を経験することがなかった。1 回目の見学では、午前中に見学をする時間的・精神的余裕がないだろうと判断されたため、午前の見学は前の週になった。1 回目の実習後、学生たちは当週の内容をどう把握しているかを確認し、復習授業での練習を調整することも必要だと気づいた。そのため、実習当週の清水先生の授業を見学するようになった。

3. 3. 2 実習生の授業の見学

前回の見学と同じように、各自実習日の前週に、他の実習生の授業を見学することがあった。授業を見て、いいところと改善できるところを記録し、交流し合うことは目的の 1 つである。また、鷲見先生と他の実習生が授業の様子を把握できるよう、ビデオカメラを持ち、授業録画を担当する。授業動画を共有することにより、全員の参考になる。

実習生の授業が終わったら、10分ほど古川先生と交流する時間があった。その時、先生の意見やアドバイスを聞いたり、自分の感想を話したりすることにより、授業の質を高めるコツを学ぶことができる。

最後の実習（第15課）を担当したのは翟首芸であり、最初の実習（第2課）を担当した杜保娣がその授業を見学し、録画をし、機械を全部持って帰った。それをもって、全員他の実習生の授業を計2回見学を終えた。

3. 4 見学から学んだこと

3. 4. 1 王嫻

初回の見学で、特に印象的だったのは古川先生と清水先生と学生とのやりとりだった。

古川先生は学生1名ずつの名前だけでなく、趣味や特長まで把握している。特定の学生を当てることを通して、授業の雰囲気や和らげ、学生との信頼関係を築くことができる。学生とのコミュニケーションをよりスムーズにするためには、事前に座席表を作成したり、学生の趣味や特長をメモしておいたりしたほうが良いと思う。

また、古川先生が学生の間違った答えに対して、質問の形をとって学生自身に修正を促すアプローチにも感銘を受けた。正しい答えをただ教えるのではなく、学生自身の気づきを引き出すことで、より深い理解が生まれると考える。

第2回の見学では、清水先生の授業を見せてもらった。清水先生はパワーポイントと簡潔な指示を組み合わせる授業を進めていた。「イ形容詞 イ→くします」といった文法の練習では、抽象的な質問ではなく、パワーポイントの図を用いて学習者が自然に発話できるような指示を行っていた。(例えば、学生に「甘くします」と答えてほしい場合、コーヒーに砂糖を入れる図を使う。)教師の発話を減らすのに役立つ方法で、非常に参考になった。

そして、ほかの実習生の授業も見学した。その課の重要なポイントになる文法をはっきりと黒板に書いて、学生に改めてその課のどの部分がか最も重要であるかを認識してもらい、学生の印象を深めた。

少し気になる部分として、パワーポイントの字が少し小さかった。学生の机とスクリーンとの間に、すこし距離があるので、パワーポイントを作る際、できるだけ字を大きくしたほうが良い。この点について、自分の授業にも同じような問題があって、これから注意していきたいと思う。また教師の質問や説明の言葉使いについて、教案を作る際、教師用語が既習語であるかどうかを予め確認する必要がある。

最後に、第3回の見学では、古川先生から学生をランダムに指名する方法を学んだ。順番に学生を当てることで、同じ学生が何度も指名される状況を避けることができるが、逆

に学生が次の順番を予測して、宛てられる前にしか授業に参加しないリスクもある。学生の集中力を保つためには、今後の授業でランダムに学生を指名していきたいと思う。

第2回と同じく、今回もほかの実習生の授業を見学した。その課を担当する実習生が授業を行うとき、常に時間をチェックし、それに基づいて学生とのやり取りを増やしたり、減らしたりをしていたようだった。そのおかげで、ほぼ完璧な時間管理ができた。

時間管理のほか、間違いやすい漢字や仮名を学生に前に来て書いてもらうという方法もとても勉強になった。漢字・仮名についての印象が深まり、間違いを防ぐことに非常に役立つと思われる。

3. 4. 2 王肖

先生方の授業を見学させていただき、いろいろ勉強になった。先生方にはそれぞれ独自の授業スタイルがあったが、いずれの先生の授業にしても、雰囲気明るく、交流しやすい授業であった。学生の理解度や学習進度には差があるが、質問を組み立てて学生1名1名の問題意識を掘り起こし、思考させたり、回答させたりして学生の学習意欲や知識の定着度を高める力に感心した。古川先生と清水先生のように余裕をもって学生に授業をすることがまだできないが、余裕を持てるようになる方法を教えていただいた。それは積み重ねることである。例えば、直接法の授業では、説明より、簡単な例を挙げて言葉の意味や文法項目の違い等を学生に示した方が分かりやすいというポイントがある。日々の例文の積み重ねがなければ、その場で分かりやすい例文を挙げることは不可能である。授業の余裕と心の余裕を持つには、日常生活から用例を収集し、学生の理解度の違いに応じて具体例を示すことが重要である。

また、実習生の授業も見学させていただいた。初めて教壇に立つ実習生もいたし、指導経験のある実習生もいた。授業担当の実習生のスライドや教案を事前に読んだので、授業の全体像はある程度想像できた。実習生は古川先生や清水先生ほど完璧ではなかったが、みんな真剣に授業を行い、一生懸命に取り組んでいる姿が見られた。みんなそれぞれ長所と短所があった。また、共通の改善点もあった。授業後は、先生のフィードバックをいただき、授業の状況について一緒に話し合い、いろいろ本当に勉強になった。最も重要なポイントは以下の点だと考える。1つ目は、時間配分のことである。教案を作成する際には、授業の重点に必要な時間を割り当て、授業をする際には、常に時間配分のことを意識しながら授業を進める必要がある。2つ目は、学生にたくさん発話させることである。質問することで、学生に自分自身のことや周囲のことについて話してもらい、知識の定着度を高めることができる。3つ目は、学生のフィードバックを重要視することである。学生の回答や表情から、知識ポイントを習得したか否かを判断し、必要に応じて回答に基づいて追加質問をする。

3. 4. 3 王妥妮

①時間配分とコントロール

清水先生と古川先生の授業を見学し、お二人の授業の時間配分及びコントロールのベテランの技を見た。

時間をうまくコントロールするためには、まずは学生に投げる質問の内容をよく考える必要がある。難易度が低かったらチャレンジ性もなくなり、高かったら学生が答えにくく時間を無駄にしてしまうことがある。そのほか、実際の授業をするとき、時間が足りなくなりそうになったら授業の内容はどこか削減できるのかも工夫しなければならない。これも、私が実際の授業をやる時にうまくできなかった部分である。

②学生とのやりとり

今学期の授業を見学して、一番印象深いのは先生と学生とのやりとりということである。特に午後の古川先生が担当した授業は、主に学生に既習の語彙・文法で発話させるため、どのように学生を自らに発話させるのか工夫しなければならないことがよくわかった。

古川先生は、学生一人一人の状況と趣味を把握しており、既習の語彙・文法に基づいて学生が興味のある内容を加えて、楽しそうな雰囲気が出ている授業環境を作り出した。実習生の私から見れば、このような学生との絆を作るのに時間がかかると思うので、どのように短期間で学生との距離を縮めるのが課題の一つである。

幸いなのは、実習に参加するのは私だけではないため、他の実習生たちとの情報共有で学生たちに関する豆知識をできるだけ把握でき、二回目の授業でも一回目より楽しそうな雰囲気を作ることができたことだ。

③学生のレベルと参加態度

学生たちの授業への参加態度は思ったより積極的で、レベルも高かった。そのため、学生たちが先生とコミュニケーションするときさまざまな話をできた。自分も教案を作る時にも、学生の答えに応じてさまざまな内容を準備しなければならないと気づいた。

3. 4. 4 宋幹秘

初回の見学では、実習生全体が参加した。NACの先生方は親しく接して下さり、案内して下さった。初回は、古川先生が担当された『できる日本語』の初中級第1課の『ことばノート』と『文法ノート』の復習授業を見学した。授業の流れから時間配分の把握まで完璧だった。実践する前に、時間配分がとても不安だったので、特にその時間の流れについて記録した。

1 回目の実習前後の見学は清水先生、古川先生、実習生の授業であった。清水先生の授業は第5課の文法の導入であった。身近なものからゆっくり文型を導入して理解させた。学生に自由に発話させて、楽しい雰囲気を作った。学生が出した例を親しみやすい雰囲気の説明した。学生的情绪を随時に観察し対応していた。古川先生の授業は、第5課の『ことばノート』であった。限られている時間でうまい演技を交えながら授業をされた。そして、実習生の『文法ノート』の授業を見学した。初回の実習だが、実習生が落ち着いて授業を行った姿に感動した。さらに、当日古川先生とも交流の機会をいただき、3人ともその場で自分の感想や意見などが交流できた。それらの経験を積んで、次の週の実習で活用したいと思った。

2 回目の実習前後の見学は、実習日の前の週の清水先生、古川先生、実習生の授業と実習日当日の清水先生と古川先生の授業である。1 回目の実習の経験もあり、今回の見学は特に自分の課題について、先生方の解決法を勉強した。例えば、先生方の指名の仕方やメリハリ、学習者へのフィードバックなどについて特に注意を向けた。また、1 回目で指摘された改善すべきところについても先生方と交流した。さらに、次の週の授業内容についての問題点も先生方や同行実習生と交流した。数回の見学で、自分が解決したいところ、気づいていないところ、注意が向いていないところを発見した。皆様との交流で、解決策や対応策を考えておくことができた。

3. 4. 5 翟首藝

実習生の授業を実際に見学したり、録画を見たりして、いいところを自分の授業に取り入れ、改善できそうなところを自分の授業で注意するように心がけた。前の週の実習生の授業では、日常生活で見られるモノ（スーパーのチラシなど）を授業に持ち込んで学生たちに臨場感を与えることに成功した。それを参考に、1 回目の『ことばノート』では言葉をたくさんのイラストで意味を理解させるようにした。（ただし、意味を理解させる必要がなく、その言葉が使われるコロケーション、つまり使い方を理解させたり、その言葉を使い練習させたりすることこそ重要だと後に気づいた。）また、実習生（王）の授業を見学して、板書の書き方を大変勉強になった。1 回目の授業では、学生に背中を見せてどのように書いたのか学生が見えないように板書をした。学生のほうを向いて板書しようというアドバイスをいただいたが、少しハードルが高い。ダジさんは同じく黒板を向いていたが、少し体を低くした。それで、学生たちは何を、どのように書いたのかきちんと見えた。それは自分の課題解決につながった大変参考になったポイントである。

古川先生の授業を見学して、ベテランとの差を痛感できた。経験のある教師はどのぐらいの内容をどのぐらいの時間で終わらせるのか認識できており、時間が足りない時にはうまく内容を調整したりできる。また、よく聞けば、言っていることがすべて勉強になるぐ

らいに、ほとんど無駄な話がない。その差を縮めるために、“たくさん走ってみる”ことが大切だと考える。これからはアルバイトでも非常勤の勤務先でもまた教えるチャンスがあるので、ぜひ今回見学したことを参考にしたいと思っている。

3. 4. 6 杜保娣

古川先生と清水先生の授業を見学できて大変勉強になった。

古川先生は学習者の日本語レベルと既習知識を十分配慮し、なるべく身近でわかりやすいことばで授業を行い、いろいろな日常場面（特に学習者にとって役に立つ場面）で限られた時間を効率的に活用した。学習者の学習状況が確認されることは大変参考になったポイントである。また、初心者であれば、事前に学習者がどのような誤用が出るのかを予想する必要があると考えている。

清水先生からも色々ご意見ごアドバイスをもらった。特に学習した内容を確認する方法である。単に「皆さん、この文法はわかりましたか」や「何か質問がありますか」などのようなあまり意義がない質問をしないように、学習者に具体的な質問に答えさせる。また、学習者が偶然に答えられただけで、実際は内容がちゃんと理解できていないことを防ぐために、簡単に見えるような質問をどんどん出しつつ（例えば、だれにももらいましたか？だれがくださいましたか？何をもらいましたか？）学習者にいろいろな使用場面を意識させたり、覚えさせたりすることが肝要だと考えている。

また、もう2人の実習生の授業を実際に見学したり、他の実習生の皆さんの録画を見たりして、今後の授業に役に立つ考え方がたくさん得られた。実習生はみんな利点も欠点もあって、初めて教壇に立って教えるにもかかわらず、熱意を持って授業に臨んだ。しかし、改善すべき共通点もある。例えば、時間管理など。実習生の皆さんは誰も初めて教壇に立つわけだが、緊張しすぎたり、興奮しすぎたりして、ある内容の説明が長くなりすぎることがある。同時に、説明せずに直接答え合わせだけをして、時間のペースを引っ張りすぎてしまう状況もときにある。もうすこし時間を意識して、特に省略すべき所や省略してもよい所を臨時応変に調整できたらいいと考えている。

3. 4. 7 範俊梓

実習期間に、古川先生と清水先生の授業を2回以上見学できたことは、非常にありがたく思っている。復習の授業と導入の授業のコツを把握できるよう、この貴重な機会を大切に活用した。

最初の見学対象は、古川先生の授業（4月13日3限目と4限目）だった。先生は、学生の日常生活やこれから役に立ちそうな場面を作って、ことばや文法を説明した。実物も補

足として上手に利用した。その後の見学でも、先生の優れたコツを拝見した。学生が間違えた時、古川先生はその間違ったところを提示し、学生自分で正せるようにしていた。それに対し、先生はわざわざ間違った表現を言い、学生に判断させたこともあった。これにより、学生は学んだ知識が把握できたかを確認でき、知識の定着にも助けになるとわかった。

清水先生の授業は、文法導入を主としているため、古川先生と違っていた。自分の実体験でウォーミングアップしたり、身近な出来事を提示したり、学生の視線を学習項目に集中させた。そして、教材のイラストや生教材を活用し、場面について質問しながら、文法項目を導入した。ロールプレイの種類も多くて、印象的だった。左右対話、前後対話、グループ分け対話、リレー式対話、様々な形のロールプレイを行った。学生が飽きずに練習できるよう工夫した。

実習生の授業の見学は、いいところと改善すべきところが見えるため、自分にとって、いい勉強の機会となった。他の人のいいところ、例えば、教室を回りながら授業を行うこと、学生が答えられるよう工夫した質問、面白いオープニングとクロージング形式など、自分も模倣して授業で応用できる。改善すべき点があれば、ちゃんと記録した。例えば、学生の質問に答えられない時のやり方や、板書をする時の体の向きなど、実習生に伝えるだけではなく、自分も今度の授業でこのような問題が起こらないように注意する。授業後は、授業担当者と見学者が二人とも向上できるよう、古川先生と意見交換したり、交流したりして、共に成長したと思っている。

4. 実習経過

実習期間は2023年4月13日から7月27日まで、総計15週間であった(うち第一回目は実習生全員が清水先生と古川先生の授業の見学)。実習生が一人あたり二回の授業を担当し、内容は『ことばノート』と『文法ノート』であった。また、全体で4月12日(春学期第1週)、6月14日(春学期第9週)、8月2日(春学期終了後)の三回の授業を行った。

本章では、授業準備と流れ、実習生それぞれの授業状況と振り返りについて記述する。

4. 1 授業準備

授業の準備については、まず4月12日に1回目の全体授業をした。授業では、鷲見先生とTAの陳釗穎先輩と一緒に授業の流れ、担当順番、注意点について話し合った。

その後、実習生それぞれは自分が担当した部分の授業の教案とスライドを作成した。具体的な内容としては、教案には授業の流れ、教師の発話、学生とのやりとりなどを書いた。スライドは、問題と回答例、授業用の写真、イラストなどで構成した。教案とスライドは授業日の前の週の金曜日正午までTACTにアップロードし、鷺見先生からコメントを頂いた。そして、鷺見先生のコメントに基づいて教案とスライドの内容を再考し修正した。

担当者が授業当日にバスを利用し、教室に着いたら授業の準備をした。主には、パソコンとプロジェクターの設置である。そして、見学者が復習テストを印刷し、三脚とビデオカメラの設置をして、録画できるように準備した。

4. 2 授業の流れ

表5 授業の流れ

活動	時間	使用教材	手順
ウォーミングアップ	5分		<ul style="list-style-type: none"> ・自己紹介をする。 ・既習単語や文法を使って、コミュニケーションをとり、発話意欲を喚起する。
復習テスト	10分	テスト用紙	<ul style="list-style-type: none"> ・テスト用紙を配り、テストをする。 ・学生が書いている間に机間巡視し、必要に応じてヒントをあげる。 ・解答を書き終えたら、用紙を回収する。 ・授業後にテストを採点し、次週用紙を返却する。
復習授業	『ことばノート』50分 『文法ノート』90分	『ことばノート』 『文法ノート』	<ul style="list-style-type: none"> ・教材の設問の答えを確認する。 ・生教材を使ったりして、学習項目を使った発話を促す。
クロージング	5分		<ul style="list-style-type: none"> ・学習項目を使ってコミュニケーションをとり、学習内容を思い出させる。 ・必要に応じて補足説明する。

4. 3 それぞれの授業状況と振り返り

4. 3. 1 王嫻

初回の授業内容と状況

初回の授業は『ことばノート』の第8課を担当した。第8課は、「ありがとう」をテーマとしており、『ことばノート』ではそのテーマで、「①自分がお世話になったことを他の人に話すことができる」「②お世話になった人にお礼を言うことができる」「③「親切にされた経験を話したり親しい人に手助けを申し出たりすることができる」ようになるための語彙を学習する。具体的な学習項目として、「茶碗」、「花瓶」、「机」などの日常生活の中でよく使われる物に関する言葉もあるし、「運転手」、「駅員」などの職業に関する言葉もある。ほかに、「直す」、「教える」、「拾う」などの人の動作に関する言葉もある。

まず授業の導入の部分では、「いつほかの人に『ありがとう』、『すみません』と言いますか？」と学生全体に質問した。学生が学習項目に関連する言葉を使って「プレゼントをもらったとき」のように応答することを期待したが、質問が曖昧であったため、学生がうまく応答できなかった。学生の応答を引き出すために、場面設定しようとしていたが、なかなかいい説明を思いつかず、時間を多く使ってしまった。勉強になったこととして、長らく説明をするより、状況をはっきり説明できる図(例えば、道がわからなくて、駅員さんに質問する場面を表す図)を用意しておいたほうが効率的だと思う。

また、「湖(みずうみ)」を教える際に、琵琶湖の写真を提示した。「琵琶湖に行ったことがありますか」と学生に質問し、雰囲気盛り上げ、学生に日本語を使わせることができた。

さらに、動詞を「て形」に変形し括弧に入れる練習問題を行う際、学生の日常生活について質問したりして、日本語を使わせることができた。例えば「店長が車で駅まで(おくって)くれました」という問題について、「〇〇さん、バイトしていますね。店長に送ってもらったことがありますか」のように、把握している学生の豆情報を参考して、質問した。

最後、「隣の人と2分ぐらい話した後、ほかの学生の前で自分の作った文をシェアする」という授業活動をデザインしたが、残った時間がわずかであるため、一部の学生しか発表できなかった。

古川先生からのコメント

まず、時間管理に気を配ったほうがいいと先生が指摘してくれた。教案を作成する際、各練習問題に必要な時間を想定することが重要である。

また、「教師の発話を減らしたほうがいい」という指摘ももらった。教師の発話が多ければ多いほど、その分学生の発話が減る。説明するより、図で表したり、例文を提示したりしたほうがよりはっきりだと考えられる。

最後、練習問題の意図を理解すべきである。授業目標は「ことば」をたくさん使わせることである。確かに文法は重要であるが、ことばの方はメインであることを忘れてはいけない。

鷲見先生からのコメント

学生の名前を覚えて、下を向いている時間がほとんどない点がよかったと先生がコメントしてくれた。学生の名前を覚えること、常に目を見てコミュニケーションすることは学生と信頼関係を築く第一歩だと言えよう。

また、ウォーミングアップのデザインについてもっと工夫すべきことである。発話しやすい雰囲気を作り、学生の緊張をほぐすため、ウォーミングアップのところでもまず日常生活について雑談したり、質問したりしたほうがいい。

最後、板書を計画する必要がある。板書しようとする内容を書く必要があるかどうかをまず考えておいた方がいい。

振り返りと改善点

落ち着いて学生とやりとりをして、授業の雰囲気もよかったが、不足のところがまだまだたくさんある。

まず時間配分について、時間をうまく管理するためには、アラームを設定したり、リハーサルを何度も行ったりすることが役立つであろう。「必ず押さえる」部分と、「時間が無くなったら言わなくてもいい」部分を予め計画しておくことで、慌てずに授業を行うことができる。

そして教師の発話について、学生にどんどん発話してもらいたかったが、場面設定の説明や自分に関する話などで、つい話しすぎてしまった。学生に積極的に発話してもらうための質問形式を考えておいた方が大切である。

最後、教材の意図についての理解が足りなかったことが指摘された。第8課の文法がとても難しいため、つい文法を中心に授業活動をデザインしてしまった。『ことばノート』の授業では、文法よりことばの練習が重要なので、そこに焦点を当てた授業活動を計画すべきだ。

2 回目の授業内容と状況

2 回目の授業は、『文法ノート』の第11課を担当した。第11課は、「地域社会の中で」をテーマとし、『文法ノート』ではそのテーマに基づいて、地域の日本人に自分の最近の

生活や今困っていることなどについて話したり、地域の活動に参加したりすることができるようになるための文法を学習する。復習する文法項目には「Vようになります」、「Vなくなります」、「Vたばかりです」、「Vながら～（同時進行）」、「～と言っていました」、命令形、禁止が含まれる。

まず、担当するクラスにおいて、料理好きの学生が多いという情報を利用しウォーミングアップを実施した。学生に「日本に来る前にどのような料理を作っていましたか」と質問した。それに対して、日本語で料理の名前を言うことができない学生がいた。その時、教師として潔く答えの候補を出したり、ほかの質問に変えたりすべきだが、学生を見て答えを産出するのを待つだけになってしまった。この点について、後で先生方のコメントをもらって、学生が答えられない場合、即時に助け舟を出すことの重要性を認識した。

次に、文を作成させる練習の部分で、答え合わせをした後、できるだけ多くの学生を指名し、作成した文を発表させた。学生が正しい答えを提供できない場合、教科書にある図を指したり、問題のある部分を上昇調で繰り返したりしてヒントを出した。

授業の最後、90分が経過したことを知らせるベルの音を聞き、誤って110分が経って授業を終わらせなければならないと勘違いしてしまった。時間管理をよりうまくするため、アラームを設定し、残りの時間を常に把握できるように準備しておくことが重要であることを認識した。

古川先生からのコメント

まず、時間配分を注意すべきと指摘してくれた。時計を確認したり、アラームを設定したりして、授業の進行を常に把握する必要がある。授業内容を「必ず実施する項目」と「時間が足りない場合には削除する項目」に事前に分けておくことも有効な方法である。

また、質問の意図や指示を明確にすべきと先生が指摘してくれた。質問や指示が曖昧であつたら、学生が戸惑う恐れがある。学生に質問の意図を把握してもらうために、質問の指示を明確にすることが大切である。例えば「〇〇さん、文を作ってください」という質問の仕方より、スライドにある単語や文法を指しながら「〇〇さん、これを見て・使って文を作ってください」のほうがより明確だ。つまり、どのことば、どの文法を使って、どのようなことをしたらいいかを全部明らかにすべきである。

最後、学生の言い淀みなどに対して、直ちにフォローすることが重要である。学生が言い淀んだ場合、教師として候補の回答を提示したり、ほかの質問に変えたりすることが役立つ。黙って待つことは、時間の浪費になるだけでなく、授業の雰囲気にも悪い影響を及ぼす可能性がある。

鷲見先生からのコメント

まず、学生が答えている、考えている際に、スライドのほうではなく、学生を見るべきと指摘してくださった。学生が発話している時、目を見ることで、話を聞いていることを示すことができる。また、学生の様子を観察することで、具体的にどの部分で問題を抱えているかを特定するのに役立つこともある。

また、「クロージングは工夫していたよかったが、オープニングはなく、テストのあと、すぐに答え合わせに入ってしまった。話しやすい雰囲気を作ることを心がけよう」と指摘してくれた。クロージングの際には、学習項目である文法を再度復習できる接続問題を設計した。一方、オープニングの部分において、「料理」を話題にして学生に質問をしたが、1名の学生を指名した後、すぐに答え合わせに入った。1名の学生だけではなく、できるだけ多くの学生を巻き込んで、「話しやすい雰囲気」を作るようにもっと工夫すべきである。

最後、学生が発話の機会を増やしたことはとてもよかったが、フィードバックが課題となってしまうとコメントしてくれた。今回の授業で、「学生の発話を増やす」は事前課題の一つとして設け、学生にたくさん日本語を使わせるため「自由に文を作らせる」のような授業活動をデザインしたが、うまくフィードバックできなかった。せっかく学生が文を作ってくれたから、それが正しいかどうか、正しくなかったらどう直せばいいかを直ちにフィードバックすべきである。

振り返りと改善点

まず時間配分について、1回目の授業の時、時間配分がうまくできなかったため、今回の授業の準備段階で、各練習問題にどれぐらいの時間が必要かを想定した。しかし、授業の時は、緊張のあまりに90分が経ったことを知らせるベルの音を聞いて、110分が経ったと勘違いしてしまった。時間配分を今後の課題として、引き続き取り組んでいきたい。

また、今回は学生にたくさん発話してもらうために、「自由に文を作らせる」というような授業活動をデザインした。確かに学生の発話が増えたが、それに伴って、考えたことのない新しい問題も出できた。それは、学生の作った文が正しいかどうかはどう判断すればいいか、また非文か不自然な文だと判断した場合、どう直せばいいかという問題である。複数の学生にせっかく文を作ってもらったものの、日本語教師としての能力が不足であるため、明確なフィードバックを与えることができなかった。これから文を作らせる場合において、テーマを予め決めたり、文の前半部分あるいは後半部分を与えたりして、学生の作れる文の範囲を絞ったほうがよりいい方法だと考える。学生の誤用に対応できるように、自分の日本語スキルをさらに磨きをかけて向上させたい。

さらに、授業を行うときの視線と身体の向きについて、これからも引き続き取り組んでいきたい。授業の後半において、学生の質問にうまく答えられなかったため、学生の表情などをチェックすることに不安を感じ、身体の向きや視線が無意識のうちにスライドのほ

うに向くようになった。学生とコミュニケーションを取ることは大事で、逃げてはいけない。今後授業を行うとき、視線と身体の向きを心がけたい。

うまくできなかつたところがまだたくさんあるが、同じ問題を繰り返さないように、質問のデザインを工夫しながら、自分の日本語能力と機応変に対応できる能力を引き続き鍛えたいと決意した。

4. 3. 2 王肖

初回の授業内容と状況

初回の授業では、『できる日本語』の初中級の第5課の『文法ノート』の復習授業を担当した。第5課は、「大変の日」をテーマとしており、『文法ノート』では、そのテーマに基づいて、日々の生活の中で何かハプニングが起こったとき、他人に事情を説明したり手伝いを求めたりすることができるようになるための文法を学習する。復習する文法項目には「～かもしれませんが」、「～たあとで」、「～していただけませんか」、「～たら、～た」、「～て、」という6つのポイントがあった。

初回の授業準備の内容には、教案やスライドの作成と見学が含まれた。まず、教案を作成する前に、復習項目を重要性和難易度の順に並べた。一番重要で難しかったのは「～て、」の使い方であり、繰り返し練習が必要であった。なお、『文法ノート』では「～て、」に関する問題が4つあった。そこで、授業計画を立てる際には、「～て、」の練習問題を最後に置くことにし、『文法ノート』の問題構成の順番を変えた。また、フォーラムを利用し、他の実習生に共有してもらった学生の個人情報や授業状況を集め、設問を立てて教案とスライドを作成した。振り返りの所でも触れるが、導入(意味や用法の説明)に長い時間をかけてしまって学生に練習してもらった時間は少なかった。それに加えて、「て」の練習をしきれなかった。

他には、先生の授業及び実習生の授業を見学した。先生に「演技で教える」ことを教えてもらった。例えば、「縛る」の意味を学生に伝えるときは、説明するのではなく、縛られているような身振りで示す。直接法の授業では、直観的で簡単に理解させる方が重要なので、演技や実物で示す方が分かりやすい。また、第4課の実習生の『ことばノート』の復習授業も見学した。授業の雰囲気はよかったが、時間配分の所では改善の余地があった。実習生はアイスブレイクをしっかり行い、初回の授業であるにもかかわらず、学生との距離感がなかった。補足的な知識も多く、授業全体が非常に充実していた。ただし、授業の後半部分は少々慌ただしかったようであった。時間配分のことを常に意識しなければならないことが分かった。見学後、鷺見先生のコメントに基づいて教案を修正し、実習生に共有してもらった授業の振り返りを参考にし、初回の授業に向けて準備を進めた。

古川先生からのコメント

①指示の仕方が分かりにくかった。まず、学生を当てる際には、誰を当てるかを明確に示す必要がある。また、質問の順番を変えて教える際には、その意図もきちんと学生に伝えておく必要がある。さらに、何を聞きたいのかを明確にする必要がある。

②後ろを見て、学生がついてきているかを確認すべきである。学生がきちんとついてきているかどうかを確認しないと、授業の効果は半減してしまう。次の質問に進む前には、学生の反応を見て授業のポイントを理解したかどうかを判断する必要がある。

③導入の部分が長かった。復習の授業では、説明を聞かせるより、いろいろ発話させて練習させることの方が重要である。

④学生を満足させる必要がある。難易度に応じて回答者を変えたり、事前にやってもらった宿題の答え合わせをしたりすることで、学生に達成感を与える必要がある。

⑤教える文法項目の構成を変えて、大事な文法を最後にした。しかし、時間管理の問題で、肝心なところを教えきれなかった。教案を立てる際には、どのような部分が非常に重要で詳しくやる必要があるか、どのような部分はスキップしてもよいかを明確にする必要がある。授業中も常に時間の経過を意識し、重要な部分を時間に合わせて行おう。⑥分かりやすい例をたくさん作っておこう。

鷲見先生からのコメント

①文法項目の分析が十分にされていない点が問題である。教科書の例文や文法書をよく分析した上で、設問を立てて学生に聞いたり説明したりする。そうしないと、問題の中で一番適切かつ重要な例文を正確に特定できず、学生に正確に説明できず、適切な例文を挙げることもできない。例えば、「てしまいました」を「無理です」「だめです」と強調しているが、「道に迷ってしまいました」はそれで説明できない。また、「て形で理由」は「ので」や「から」と何が違うのかをしっかり理解していないと、そのポイントに触れたり、簡単な例で説明したりすることもできない。

②授業の面白さを重視するのは重要であるが、最優先という意味ではない。授業の目的は学生に文法項目の練習をしてもらい、知識の定着度を高めることである。「いまやれること、やりやすいこと、おもしろいこと」だけをやることになってしまい、学習者にも「何が重要なポイントか」が伝わらない。そのため、「いまこれをやる目的は何か」という目的意識を常に持たなければならない。

③経験の浅いうちは教案のスク립ト化が必須である。スク립ト化することで時間配分や授業内容を可視化できる。

振り返りと改善点

- ①教案をよく検討できなかった。よりよい教案がないと、よりよい授業は成り立たない。全体的に言えば、まず、教案の構成はよく立てなかった。時間の配分はまだ把握でめ、最後まで行けなかった。「理由+て、事実(非意志)」という一番重要なポイントもきていないにもかかわらず、一番難しく重要な部分を最後のところにした。時間のたよく教えられなかった。学生は「～て、」をよく理解したか否かも確認できなかった。また、質問の投げ方や練習のやり方もよく考えられなかった。例えば、「てしまいました」の場合、動詞のテ形さえ分かれば、「動詞+てしまいました」という文を作ることができる。しかし、その文を作れても、「てしまいました」の意味を本当に理解したとは言えない。どのような質問を学生に投げたらいいのか等を考え直さなければならない。
- ②教室の雰囲気づくりが気になりすぎて、ゲームに必要以上の時間を使ってしまった。意識したが、臨機応変に調整できなかった。
- ③パワーポイントのアニメーションの効果をよく確認できなかった。
- ④答え合わせの授業にならないように、いくつかの問題を選んで学生に答えてもらったが、その問題を選んだ理由を学生に教えなかった。学生たちを混乱させた。休憩中、ある学生に「先生、答え合わせを全部やらないですか」と聞かれ、そのバランスがよく取れていないことに気づいた。
- ⑤学生の名前を間違えないように、「〇〇さん」を言う度に、テーブルの上に置いてある座席表を見た。しかし、授業時間が非常に限られているので、一秒でも大切しなければならない。無駄なことに時間を使ってしまうと勿体無い。学生の名前と顔をしっかり覚えておく。

2 回目の授業内容と状況

第2回の授業では、『できる日本語』の初中級の第10課の『ことばノート』の復習授業を担当した。第10課は、「旅行に行って」をテーマとしており、『ことばノート』では、そのテーマに基づいて、旅行中のパニックや問題点を他人に伝えたり、観光地の風景や建物について簡単に説明したりすることができるようになるための言葉を学習する。復習項目には、「壊す、刺す、叱る、踏む」等の旅行先で不利益を被る場合に使われる動詞、「行う、造る、開く、建てる」等の建築づくりやイベント活動に関連する動詞、「会場、国際、世界、工場、博物館」等の見学や旅行に使われる名詞等があった。

第2回の授業準備の内容には、教案やスライドの作成と見学が含まれた。教案を作成する際には、学生にたくさんの練習をしてもらうためには、学生の身近なことについて設問を立てた。しかし、鷺見先生からもらったコメントのように、学生が自由に発話できる質問はほとんどなかった。そのため、学生の授業への参加もある程度限定されていた。

他には、先生の授業及び実習生の授業を見学した。先生の授業を見学し、学生の日本語能力に応じて設問を立てる必要があることが分かった。特に日本語能力が低い学生に難問

を投げないことである。どのようなクラスにしても学習の遅い学生はいる。また、自信のない学生もいる。学習効果を向上させるため質問によって負担を軽くしたり、答える順番によって負担を軽くしたりする。学生が質問に答えられない場合、自分で誤答を正させることでなく、まず他の学生に答えてもらう。答えた後、元の学生に戻り、他の学生に答えてもらったことを繰り返したり、練習したりしてもらう。また、第9課の実習生の『文法ノート』の復習授業も見学した。第9課の文法項目の数が比較的多かったため、時間がタイトであった。授業の前半では学生とのやり取りが適度でメリハリがあったが、後半になると答え合わせのような形になった。時間配分の重要性を再認識した。実習生の声が非常にクリアで分かりやすかった。

古川先生からのコメント

- ①指示が明確ではなかった。全員で答えるか、一人一人で答えるかをさらに明確する必要がある。また、質問の意図が分かりにくかった。
- ②全員を順番に当てた。ランダムに当てる必要もある。
- ③最後の「もっと覚えましょう」の片仮名の部分で更なる練習を加えたら良かった。片仮名は長いので、どの部分が全体として使われているのか、どの部分が何を意味しているのかを理解するための練習を加えた方がいい。
- ④学生の答えや表情に気を配る必要がある。学生の誤りを直接的に指摘するよりも、もう一度答えてもらったり、答え直してもらうように誘導したりした方がいい。

鷲見先生からのコメント

- ①ウォーミングアップは具体的に考えたが、クロージングはもっと具体的に考えておく必要があった。
- ②まだまだ理解確認のための質問が多かった。「どうしてダメですか。」とダメな理由をよく質問していた。理解確認の質問で答えにくかった。自分のことや身のまわりのことを言ってもらうことが重要なので、質問の仕方をより一層工夫しなければならない。
また、古川先生にも指摘を受けたようであるが、指示や質問がわかりにくかった。例えば、「料理はおいしいです。料理は上手です。大丈夫ですか。」という質問があったが、何を聞かれているのかわからなかった。質問する時は、答えにくい質問や意味が不明瞭な質問を避ける必要がある。
- ③学生の反応をより一層重視すべきである。例えば、学生の答えに基づいてフォローアップや突っ込む質問をしたり、誤った答えに基づいてガイダンスを提供したりする。
- ④まだ「こだわる必要のないところ」へのこだわりが見られた。そこが、「教材分析」が不十分だったという反省につながっている。

振り返りと改善点

- ①時間管理を意識しながら授業を進めた。
- ②教案はまだよく修正できていない。先生と TA の陳先輩のコメントに基づいて修正を加えたが、不十分であった。効果的な授業にするためには、より適切な質問を用意する必要があるが、質問の仕方はよく身につけていない。
- ③指示が不明確であった。意識しながら指示したが、学生の反応からみると、明確ではない所があった。教案にも関連していると思う。
- ④前回のフォーラムを見て、同じ人を何度も当てるのを避けるために、「全員を順番に当てる」というやりやすい当て方にしてしまった。臨機応変に当てたら良かった。

4. 3. 3 王妥妮

初回の授業内容と状況

初回は、『できる日本語』の初中級第7課の『文法ノート』の復習授業を担当した。第7課の授業内容は、主に尊敬語であった。

授業の準備段階は、主な流れとしては教案とスライドの作り、前の週の見学、教案とスライドの修正と授業の練習である。

本番授業の2週間くらい前、教案作りを始めた。これは私の初めの媒介語を使わないまま日本語で授業をするという教案で、始めたばかりの時にはどのような教案を仕上げるのかと迷った。今回の授業目標は学生を尊敬語を身につけるようにするため、私が書いた教案の初稿は尊敬語が何なのか、動詞をどのように尊敬語に換えるのかという文法説明を中心とする教案であった。

本番授業の前の週は、見学をした。見学をさせてもらったのは、清水先生の午前の授業と古川先生と実習生である宋幹秘さんの午後の授業であった。3人の授業を見学し、気づいた点は以下となっている。

まずは、清水先生の授業に関して、印象深い点は2つある。1つ目は学生のレベルが高くて、しかも予め予習しておいたため、授業が全体的にはうまく進んでいた。もう一つは、清水先生が文法項目を教えるときに単なる本の内容を教えるのではなく、この文法を巡って学生を自由に発話させるということである。そのため、学生はユーモアがある文を作れ、授業の雰囲気も面白くなった。雰囲気を改善したからこそ、よりよく授業を進められると思う。

続いては、宋さんの授業に関して、時間配分的にはまさに完璧だと言える。しかしながらも、実際の授業中は緊張せずに余裕を持ちながら授業をやりこなした。その一方、あまり時間にこだわりすぎると授業中の「間」を作っていないような感じがある。具体的には、ある文法項目を解説し答え合わせをしたあと、適当に学生が文法知識をきちんと理解しよ

うという時間を作ってほしいということである。実際に私は時々息ができないほどの濃厚さがある授業を受けているという感じがした。

最後に見学したのは、古川先生の授業であった。宋さんのきちんと時間をコントロールしたおかげで、文法ノートの授業時間が長くなった気がする。そのため、今回の授業は学生を自由に発話させ、文法項目を解説する時間が増えた。印象に残っているのは、古川先生が学生への発音のこだわりということである。例えば、「ましょう」のアクセントである。上昇調と下降調の「ましょう」は、それぞれの意味が違っているため、学生たちが間違えている時には、古川先生は何回も「ましょう」の正しいアクセントを発した。そして、自分も「ましょう」のアクセントに気づけなかったことを知った。

見学の所見をまとめてみると、時間配分は大事な課題だと思う。授業の量が多くなると、授業時間が長くなったが、きちんと決められた時間に授業を終わらせるなら授業の速さも上がり、学生が知識をきちんと理解できるかどうか確認できない恐れがある。古川先生によると、このような状況を解決するため、各部分の時間が決められている時間ではなく、余裕を持って時間をあげることである。例えば、文法1を説明するため5分間かかるのではなく、余裕を持って4~8分間をあげればいいのである。

見学した翌日、私は教案とスライドの初稿をTACTにアップロードし、鷺見先生から修正のコメントをいただいた。コメントと見学から勉強したことを踏まえ、私は教案の修正に入った。まずは、先ほど言った通りに時間配分を大切にし、決められている時間ではなく余裕を持って時間をあげた。そして、文法説明の部分を削減し学生たちを既習文法を使いながら発話させるため場面づくりに工夫した。

古川先生からのコメント

まずは学生への気配りである。例えば、板書を書く時には、教師の立ち位置が重要で体が書いた字を被さらないようにすることである。学生の中にはスリランカ人がいて、漢字の書き順や書き方などわからないため、学生が漢字の書き順が見えるように板書をする。

そして、教師の発話と学生の発話の量のことである。文法ノートの授業の目標は、学生が既習の文法を復習させるため、文法項目の解説はそんなに詳しくないほうがいい。重要なのは、学生が既習文法を使って発話することである。そのため、次回の授業に向けてどのように学生をより多く発話させるのか工夫しよう。

鷺見先生からのコメント

授業は「文法の導入」授業でなく、答え合わせだけを目的とした授業でもない。学習者がこの課の文法が使われた発話を理解したり、この課の文法を使って話したりできるようになるために、教科書の問題を活用していると考えたほうがいい。学習者が自分のこと、

本当のことを言ったり、自分の発想で自由に発話できる機会を増やし、「使える」ことに注目する。

もう一つは、下を見ている時間が多いこともあり、学習者が問題の答えを言っているときに、その人の顔を見ていなかった。それでは「やりとりしてる」「コミュニケーションしている」という気持ちにはなれない。

次回に向けて、自信をもって授業をするには、早めに教案を完成させて、何度も繰り返して授業をやってみることである。鏡を見ながら鏡の中の自分に向かって話しかけるように練習するといいい。

振り返りと改善点

全体としては、授業時間は110分間であったが、少し早めに授業を終わらせた。初めての授業ということで、いろいろな不足点がある。

まずはいいところとして、古川先生が言った通りに声の大きいということである。そして、文法説明のわかりやすさも良くできた点だと思う。

反省点としては、やはり学生に発話させる場をあまり作っていなかったということである。教案を修正している時には、学生を自由に発話させるよういろいろな話題を作り、スクリプト化したが、実際にやる時には学生の反応が薄く見えたため、自分も学生を発話させる場を作ろうという自信を失った。その後、授業の八割以上は私が喋っていた。早めに授業を終わらせたことも、このことのせいかもしれない。

よく考えてみたら、私は緊張しすぎかもしれない。そして、学生を当てる時にも質問の難易度を考えて学生レベルに相応しい質問をしたら、学生の反応がそんなに薄くないと思う。そのため、次回の授業の課題は自分の発話を減らし、学生の発話を増やすことである。

2回目の授業内容と状況

第2回の授業は七月二十日に行われた。内容としては『ことばノート』第14課であった。『授業時間は90分間であったが、15分ほどオーバーした。学生たちは前回より参加度が高く、授業の雰囲気も賑やかであった。

授業の準備段階は、第一回と同じく主な流れとしては教案とスライドの作り、前の週の見学、教案とスライドの修正と授業の練習である。そして、本番授業の前の週は、見学をした。見学をさせてもらったのは、実習生である宋幹秘さんの午後の授業であった。

宋さんの授業に関しては、相変わらずテキパキで時間内に授業を進めた。特にクロージングのやり方がよかったと思う。原因としては、一つは今回の復習した文法をまとめることができる。もう一つは、学生としても自分がどこがまだ勉強した方がいいと認識することができる。一方で、古川先生によると、改善点としては宋さんが計画通りに授業をやりこ

なしたが、授業をコントロールしすぎて学生の発話をきちんと聞かずにそのまま次の段階に進んだことがある。そのため、より自由度をもつ授業を作る工夫があったほうがいい。

見学の所見をまとめてみると、時間配分は大事な課題でありながら、授業の雰囲気、学生とのやりとりも重要だと感じた。授業は教案の通りにやるということだけではなく、学生たちとのコミュニケーションも重要である。そのため、学生の発話を聞き、適当なフィードバックをするのも重要な課題である。私はこの課題に関して、教案を作っている時にはできるだけ多くの場面を設定し、学生はどのような返事をするのか想像しながらスクリプト化した。

見学した翌日、私は教案とスライドの初稿を TACT にアップロードし、鷺見先生から修正のコメントをいただいた。コメントと見学から勉強したことを踏まえ、私は教案の修正に入った。主な修正としては、適当な質問を設けることである。

古川先生からのコメント

まずは、時間管理としてはしっかりしていたほうがいい。

そして、学生の当て方について、質問するのはこの質問に相応しい学生を当てるのも工夫した点である。

最後は、アクセントである。アクセントの違いによって、単語の意味も変わるのもっと工夫したほうがいい。

鷺見先生からのコメント

もっとも重要なのは、学生への気配りである。

一つ目は、雰囲気作りである。具体的には、実際の授業中で挨拶してすぐ体がスライドの方に向き、教科書に入ってしまい、ウォーミングアップにあたる部分がまったくないことで、学生たちとの関係作りまたは授業の雰囲気づくりとしてはいけないことである。解決法としては、まずは、学生の顔、様子を見て、学生との何らかのやりとりを通して、関係づくり、雰囲気づくりをして「その気にさせる」ことである。

2 つ目は、学生の活動に適当なフィードバックあるいは反応をすることである。実際の授業中では、学生がコーラスで語を読むとき、学生一人が答えるときなどに、私はまだスライドや手元の教科書・教案を見ていた。もし学生たちとよりよくコミュニケーションをするなら、学生を見るのが重要で、誰が言えていないか、どのような表情をしているかを常に確認する。

学生を見るようにしたら、学生が答えられないときに待つか待たないかの判断も、学生の表情によって判断できる。なぜかという、学生が答えるのに時間がかかる理由もさまざまだからで、一所懸命言おうとして言葉が出てこずががんばっている最中なのか、答えが思いつかないのか、質問がわからないのかなどがあるため、学生を見ることでその状況が

大体わかる。そして、学生が何を答えていいかわからないようなときには、教師が「疑問詞疑問→選択疑問（例を挙げる）→Yes/No 疑問」と難易度を下げていくことで答えやすくする。また、よく答えられる学生には疑問詞疑問で聞き、あまり答えられない学生には Yes/No で聞くなど、質問の難易度をコントロールをさりげなくする。

学生を見て適当な質問をする一方、学生の発話をもっと拾えるようになるといい。例えば、ご飯を「たきます」と一人の学生が言っていたが、私はスルーしてしまっていた。そこですかさず「そう！たきます。〇〇さんよく覚えていましたね」と言えば、小さなことですが動機付けになる。私は学生の答えがあまりよくわからなかったり、学生の答えに納得いかなかったりしたときも、そうでないときも、フィードバックがあまりかわらない。

「～ですね」とそのまま学生の発話を繰り返すことも多かった。例えば、「お葬式」が話題のところで、「ごはんを食べます」という答えが出てきたときなどということである。

最後は、日本語力をより高めることである。発音もその一つで、「お葬式に行くとき、何をしますか」と質問していたが、その質問だと「黒い服を着ます」「お香典を持って行きます」などの答えになる。元々聞きたかったのは、「お葬式に行ったとき」で、「そうと思います(→そう思います)」「ちがいです(→ちがいます)」なども気になった。いずれも中国語話者によく見られる誤りなので、意識して直す必要がある。

他の細かいこととしては、例えば黒板で指示棒を使うときの音が気になり、威圧的な感じがするため、注意を払う必要がある。

振り返りと改善点

今回の時間はうまく計画通りに行かなかった。原因としては、以下のようなことだと考えている。

1 つ目は、学生を待つ時間が長かった。学生に質問を投げた後、学生が応答を考えるため時間がかかる。私は待つしかないと思いながら、時間が知らず知らずのうちに流れた。この問題はどうやって解決するのか今でもわからなくて、私的にはもし考えている学生を無視して他の学生を当てるのは学生の気持ちを妨げると思う。

2 つ目は、古川先生によると、質問自体が難しいところである。私は、学生をもっと自由に発話させるため自由度が高い質問をした。例えば、「夢は何ですか」「クリスマスのは何をしますか」とか、そのため学生が答えられないまま時間が流れてしまった。

3 つ目は、人の当て方である。例えば、私はある学生に「夢は何ですか」と聞いた。私が求めているのは、そんなにちゃんとした答えではなくてもいいということで、この答えに基づいてもっと発話させたかっただけなのだが、その学生は真面目な人で、この質問について真剣に考えていた。そして、時間が流れた。もしあまり真面目ではない別の学生を当てれば、時間があまりかからなかったと思う。

前回と変わった点としては、まず前回担当した文法ノートの授業と比べると、学生のテンションが高くなり、時々笑いもあった。教師としては、このような雰囲気がある授業をできるのは非常に達成感がある。そして、自分も学生をもっと発話させる工夫をした。その代わりに、うまくコントロールできず、授業の時間が長くなった。

4. 3. 4 宋幹秘

初回授業の内容と状況

初回では、『できる日本語』の初中級第6課の『ことばノート』の復習授業を担当した。第6課は、「旅行の計画」をテーマとしており、『ことばノート』では、そのテーマで、「既習語を使って、旅行に行くために事前に情報を収集したり相談したりして、旅行に行く前に準備ができる」ようにための語彙を学習する。学習項目は主に旅行計画を立てるための名詞・カタカナ語・複合語・動詞である。これらの学習項目を用いて、意味と使い方を理解し、間違いやすい漢字を正確に把握できるように指導する目標であった。

これらの目標を用い、実習の準備段階に入った。準備段階では、実習日の前の週の金曜日までに教案作成や教学スライドの作成に工夫した。教案を作成するために、実習生たちの授業動画を見たり、教案を読んだりしていた。また、実習生たちの見学した感想や実習生が授業を行った経験などとも交流した。それをもとに教案を作っていた。また、講義サイトに実習生が共有した学生の豆知識も活用した。第6課は『ことばノート』であり、授業を行うための例や補足したい知識を考えておいた。学生にとって理解しやすいところや学習項目の難易度も含めて、分かりやすい教案を作りたいという気持ちで教案を作った。授業時間は70分間であり、時間通りに授業を終わらせた。学習者の参加度も高かった。復習テストでは、高い点数を取った学生も何人かいた。

そして、第6課の授業を行う前に、前の週の実習生(王)の第5課の『文法ノート』の授業と古川先生の『ことばノート』の授業を見学した。見学する際に、まず、自分が気になったところについて記録した。そして、勉強になったところや活用すべきところも実習生と交流した。それらの経験を活かし、実習に活用してみたいと思っていた。実習日の当日に、清水先生の授業を見学した。

NACの先生の授業と実習生の授業を見学し、今回の授業は導入の授業ではなく、復習の授業であることに気づいた。限られた時間で授業を十分に進めていくことが大事であり、補充したいものや説明する必要がある知識について、優先順位があることに気をつけなければならない。教師はその場で柔軟に対応する能力が求められている。これらの経験を活かし、教案と教学スライドを作った。

教案を提出したあと、後ほど鷺見先生のコメントをもらった。やはり、学生とのやりとりが少なく、学生の発話が少くないという指摘をもらった。教案を書き直すことに工夫して

いた。学生とのやりとりが少ないという指摘に対して、質問の仕方や内容の調整を中心に書き直した。単なる質問でなく、学生の答えについてフィードバックしたり、自己開示したりすることが必要であると気づいた。また、補充したいものを適当に導入し、やりとりを取る機会を作った。また、それに対応し、スライドの書き直しをやり続けていた。何ヶ所かについて難度を感じ、先生に助けをもらったこともあった。最後に教案やスライドなどを作り上げた。これをもとに、第6課の授業を行った。

古川先生からのコメント

答えられない質問とされたら、その逃げ方が重要であると指摘された。そのまま逃げて答えないという意味ではない。教師は学習者に信頼されているため、そのまま逃げると、学習者に不安を与える可能性がある。その場で解決できなければ、逃げてよいが、言い方に気をつけなければならない。言い訳を言うのではなく、解決策を後で教える。教師としてわからないものもあるのは普通である。落ち着いてその場で学習者の質問に対応し、事後に調べて明らかにしてから説明する。

鷲見先生からのコメント

教具などの使い方やメリハリについて指摘された。教室では、楽しい雰囲気を作ることが重要である。学習者がリラックスした状態で勉強することがおすすめである。また、教師はメリハリをつけることが重要である。授業の最初から最後まで同じ声、調子で教えることを避けた方がいい。学習者の注意を向けるために、適宜に声の大きさ、調子を変える必要がある。

振り返りと改善すべき点

初回の授業では、時間配分に注意し調整ができたが、メリハリに気づかず、学生とのやりとりは少なかった。改善すべきところとして、次の2つの課題を出した。

課題1：メリハリに配慮し、時間内に授業を終わらせる。

課題2：学生がもっと話せるように工夫する。

初回の授業では時間通りに授業を終わらせたが、ペースが早く、学生の休憩時間に配慮しておらず、プレッシャーを与えたので、次回に注意しなければならない。教師の発話が多く、学習者が話す機会が少ないため、次回の授業では、もっと学習者が参加できるような授業の雰囲気を作れるように工夫すべきである。

第2回授業の内容と状況

第2回の授業では、『できる日本語』の初中級第13課の『文法ノート』の復習授業を担当した。第13課は、「親の気持ち・子の気持ち」をテーマとしていて、『文法ノート』で

はそのテーマで既習文法を使って、テレビや街中で気になることを見かけたとき、それについて意見を言ったり、それに関する自分の経験を話したりすることができるようになるために、文法項目「使役動詞、Vのを見ました、Vていました（過去の習慣）、NばかりVています/Vてばかりいます、使役受身、Vさせてもらいました/Vさせてくれました」を学習する。2回目の授業では、特に1回目の授業の経験から教案を作り、学生とのやりとりを増やした。学生の参加度は相変わらず高かった。課外の知識も用意したが、限られている時間では飛ばしたところもある。

そして、準備段階について述べる。第2回目の実習も、実習日の前の週の金曜日までに教案作成や教学スライドの作成に工夫した。教案を作成するために、実習生たちの授業動画を見るのだけではなく、特に第1回の実習の経験を活かして、それをもとに教案を作っていた。1回目の授業が終わり、先生に指摘されたように、学生とのやりとりが少なかった。特にそれに注意し、教案を作っていた。

2回目の教案を書く際に、限られている時間に特に困っていた。2回目の学習項目は使役表現を中心としているため、学習項目は特に多かった。それらを復習する際に、やりとりをとることが困難であると強く感じた。また、実習生自身にとっても使役という学習項目も難しいため、教案作りはうまく書けなかった。そのために、実習生は見学の機会でも、NACの先生と交流した。そのうち、チーム教育の大切さを感じた。チーム教育であるこそ、同じ教育内容について、教育進度などが確認できる。そのため、13課の内容について特に時間をかける項目について明らかにした。このように、初回実習の経験や見学、先生とのやりとりで教案を作った。

教案を提出したあと、後ほど驚見先生のコメントをいただいた。学生とのやりとりが少なく、学生の発話が少くないという指摘をいただいた。質問の仕方に工夫しなければならない。また、用例を考えておくことが大事であると指摘された。学生とのやりとりが少くないという指摘に対して、初回と一緒に質問の仕方や質問内容について考え直した。そして、用例について、場面を設定し、異なる単語の使役の活用形や例文についてたくさんの例を考えておいた。そして1回目で指摘された学生の休憩時間やペースの調整にも気をつけながら書き直した。

古川先生からのコメント

授業では、コントロールすることが重要であるが、コントロールしすぎると、マイナス効果になる。学生の授業での自由度を上げることが必要であると指摘された。授業での主役は教師ではなく、学習者である。学習者はそれらの知識を使えるようになることが求められている。補充するものでも、レベルの違いがある。それを事前に判断し、適当に導入することが必要である。

鷺見先生からのコメント

教案を作る際に「優先順位」をつけ、たっぷり時間がとるところ、ここはさっさと流すところを明確に意識しておくといいと指摘された。後半に「たっぷり時間をかけたいところ」があるのであれば、残った時間でやるのではなく、あらかじめ「ここまでを何分に終わらせる」と決めておき、意識的に時間を残しておくといいという。また、思った以上に学生が積極的に発話し、「ここで切って次に進んでしまうのはもったいない」と思うところがあつたりして、時間のコントロールが難しくなるため、そのときに、「切って先に進むか」「時間をのばして学生の発話を増やすか」の判断を迫られ、どちらがいいかは一概には言えず、「臨機応変な対応」が求められる。また、指示質問をしたら、是認だけでなく、内容についてもコメントしたり、学生の自由度・参加度を高めていくことができる。

振り返りと改善した点

初回で出した課題について、まず、課題1に対して、意識した。授業での声の大きさ、メリハリをつけて、調子を変えて授業を進めた。2回目の実習では、ジェスチャーなど、音声の調子を変えて、メリハリに配慮した。課題2に対して、前回より発話が多くなったが、学習者はもっと発話したいところもあった。学習者がもっと話したければ、教師はその場で適当に判断し、授業をコントロールしなければならない。

4. 3. 5 翟首藝

初回授業の内容と状況

5月11日に『ことばノート』の第4課を担当した。第11課は「住んでいる町で」をテーマとしていて、「住んでいる町の施設やお店の情報を聞いたり教えたりすることができる」こと、「道案内をしたり道に迷った時道を聞いたりすることができる」ことが目標である。『ことばノート』ではその目標ができるようにため、「美容院」、「空港」「歯科」など様々な施設名、「便利」、「利用」、「紹介」など施設やお店を描写するには必要な言葉、「つぎ」、「メートル」、「坂を)のぼる」、「かかる」など道案内に関する言葉を学習する。

『ことばノート』の授業ではは当該言葉の使い方を理解させて、当該言葉を使って発話させることがメインなはずだが、初回の授業では軌道を外れることになった。当該言葉に関連することを教えたり、その言葉について学生の経験を聞いたりした。例えば、「坂」ということばにおいて、「上り坂、下り坂、坂をのぼる、坂を下る」のような関連言葉を教えた。それはそれでいいが、学生の興味を引くために、必要以上に「人生には3つのさかがある」のような話も出した。それが原因で、時には雑談になり学生の練習の時間が撮られたことが多くある。また、「三味線」ということばについて、「三味線を見たことが

ありますか」のように学生の経験を聞くことが必要以上に多かった。その延長線として、時には自己開示として自分の経験をシェアすることがある。それは時間がオーバーする理由の一つだと考えられる。

古川先生からのコメント：

①授業目標を達成することが優先である。

私の授業は全体的に学生たちを取り巻き、楽しい授業であった。しかし、ときには雑談のようになってしまった。その問題点は冒頭に書いたように、学生の経験を聞いたり自分の経験を共有したりしすぎるのが原因である。

もう一つ例をあげると、「しぶやゆき」という問題において、学生に「渋谷に行ったことがありますか」とか聞いた後、「私は先月渋谷に行きました。大変散財しました」のように自分の経験を言った。そのため、古川先生から雑談のように聞こえるというコメントをもらった。

授業はあくまでも授業なので、授業内容がメインである。『ことばノート』の授業では、その言葉の使い方（コロケーションなど、例えば名詞であればどのような動詞とよく使うか）、その言葉を使う場面を作って、学生にその言葉を使い練習させることは何より大事だと考える。特に、母語の影響で間違いやすい使い方を学生に注意させることが重要である。

②授業の時間管理が課題である。

今回の授業では10分ぐらいオーバーした。前半はゆっくり進んで、後半は時間が足りずほとんど答え合わせで終わった。いわゆる授業のバランスが悪かった。教案作成の段階では時間の予定を入れた。ところが、時間がオーバーしたと気付いた時でも、きちんと調整できず、何とかなんと自分をごまかしてしまった。各問題に「〇時〇分までやる」を明記し、その時間をオーバーしたらスピードを出して調整したほうが良い、という古川先生のアドバイスをもらった。

③平仮名や片仮名の書き方を事前に調べたほうが良い。

私は日本語の平仮名や片仮名を勉強した時、形を真似して書き方（特に筆順）に気をつけなかった。そのため、板書する時でも間違った筆順で平仮名を書くことがある。学生が教師の真似をすることがあるので、正しいことを教えないといけない。

鷲見先生からのコメント

①きちんと教師の身振りをすることには成功した。

教壇を降りて、学生の顔を見ながら、はっきりした口調で、終始学生の名前を呼んで「話しかけて」いるので、学生も顔が上げて授業に参加している。それはとても良いと思う。学生同士のやりとりを促している点も良い。

②授業の優先順位を考えるべきだ。

「楽しい授業」「雰囲気」を重視しすぎて、学習目標、優先順位がおろそかになっている。今回の学生とのやりとりを、学習項目を使いながらいかに維持するかが課題である。

③自分は後回しである。

「自分が話す」のではなく、「学生に話させる」である。説明が増えれば、当然自分の話す時間が長くなる。自己開示、経験の共有は必要なことだが、時間をかけすぎないように注意すべきである。

④学生の必要に応じて関連語彙を導入する。

関連語彙も、質問して、学生が使いたい語がわからず答えられないというときが、導入のタイミングである。学生の必要性を無視して（自分基準で）、はじめから関連語をまとめて導入しようとする、どうしても「説明」することになってしまう。

⑤必要に応じて学生に聞き返す。

アイスブレイクは雰囲気づくりに効果的であった。一方で、学習者の言っている意味がよくわからないままで（顔に疑問視がついている状態でも）、フィードバックしている点が気になる。ここはアイスブレイクなので、正確さに厳格になりすぎる必要はないが、学生の言っていることが不明瞭であれば、聞き返しをして確認する、リキャストをすることを心がけるべきである。

⑥きちんと教師としての身なりで授業に臨む。

（初回では私はジーンズとスウェットで授業をした）ジーンズとスウェットはとてもカジュアルなものなので、避けたほうがいい。かたいフォーマルである必要はないが、カジュアルになりすぎないことも心掛けよう。服装は、学生だけでなく、実習の場を与えてくださっている大学（留学生別科、古川先生）に対する姿勢の表れにもなる。また、学生と年齢が近いので、ある程度、（自分も学生も）学生ではなく教師であることを意識できるような服装を心掛けるべきである。

振り返りと改善点

①仮名の書き順には要注意である 「ち」、「や」の書く順番を間違えないように。

②きちんと学生が見えるように板書する。背中を学生に向けて板書することを控える。

③自分の体験とかを言いすぎて、雑談になっていることがあるので、その部分を切って、もっと学生たちに本課の文法やことばを使い発話させる。

④グループ発表をもっと効率よく進める。例えば、一組の1人にまとめて発表させてから、違う答えがあれば他の人に補足させる。

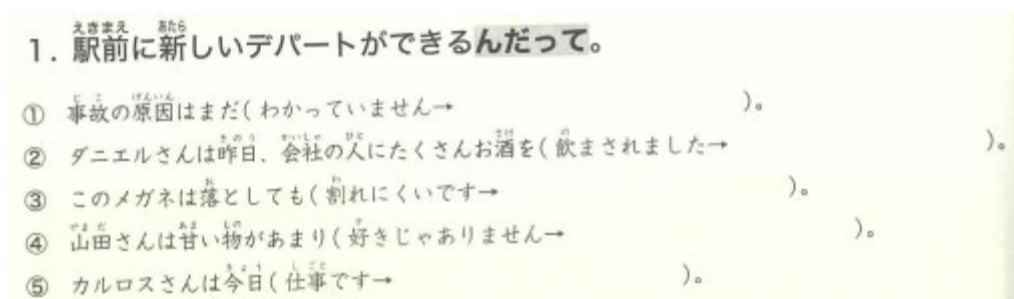
2 回目の授業

2回目は『文法ノート』の第15課を担当した。第15課は「気になるニュース」をテーマにしている、「話し合いの中で、人の話を聞いて自分の考えを言うことができる」こと、「あるテーマについて調べた情報やそれについての自分の考えを発表することができる」ことが目標である。『文法ノート』ではその目標を達成するために、他から聞いた話を表す「んだって」、話し合い中で提案の時に使う「～のはどうですか」、自分の意見を表す時に使う「～だけじゃなくて～も」、「～ないと」、ニュースでよく現れる変化を表す「～てきました」、「ていく（と思います）」、原因・理由を表す「ために」といった文法を学習する。

2回目の授業に臨む前に、初回を振り返り、2つ課題を設けた。私が設定した課題は「教師の発話量を減らす」ことと、「時間管理」である。

1つ目の課題を少しでも改善できたと思う。2回目の授業では学生に文法を使い発話させることを中心にした。できるだけ全員にもっと日本語を練習するように、日本語力が少し低い人に簡単な文を言わせたり文を朗読させたりして、日本語力が高い人には自由度の高い問題を答えさせることにも工夫を講じた。私はできるだけ発話を控えた。各問題の例文（以下に示したように各問題の前に例文がある）や、私が出した参照解答もすべて学生に読んでもらう。

もう1つの課題はうまく解決できなかった。原因としては、多めの内容を用意したのに、時間に依ってカットできなかったことにある。



また、最後の授業なので、中日本自動車短期大学、古川先生、学生たちの教育実習へのご協力に感謝を伝えた。

古川先生からのコメント

①楽しい授業であった。

1回目の授業と同じく雰囲気がよくて楽しい授業で、楽しい授業ができることも能力の一つであるというコメントをもらった。今回は特に面白そうなネタを用意したりして面白い授業ができるように工夫しなかった。それでも雰囲気のいい授業ができて自分でも意外でした。それで私が考えたのは、面白いネタではなく、学生にできるようになる達成感を与えたり身近な場面で文を作らせたりすることのほうが大事なのである。

②優先順位をつけて必要に応じて内容をカットする。

特に、複数の教師が分担して授業をする場合では時間が足りない時にカットすることは重要である。用意する内容をカットすることは勇気が要る。今回は学生に文法を練習させるために、沢山場面や活動（例えば「ために」を練習するために、原因と結果の文の組み合わせの活動など）を用意した。結局、あれもこれも練習させたいことになり、時間が足りないとしてもカットできなかった。

③いい「材料」を間違ったところに使った。

ウォーミングアップでは、「何について発表する」というテーマにおいて第15課の文法を網羅的に練習したかった。それでそれぞれの文法の使い方や場面が理解できるようになると思った。しかし、第15課の文法はまだ項目ごとに復習していないので、学生が答えられなかった。自分が何もできないとかと思いがちで、テンションが下げてしまった。最後のまとめにすれば、いい材料になるかもしれない。

④ひらがなの書き順を事前にチェックしたほうがいい。

「た」「な」「と」などの書き順を間違えて板書した。今回は教師の発話量を減らすことと時間管理に目が行ったが、細かいところが改善できなかった。教案作成の前にもう一度前回もらったコメントを振り返ると良かったと思う。

鷺見先生からのコメント

①ウォーミングアップに関するアドバイス。

鷺見先生もウォーミングアップの部分が気になった。ウォーミングでは「何について発表する」というテーマでにおいて、このように、イラストを提示しながら学生に第15課の文法を使い下線部の文を言わせる練習を用意した。そのテーマは本冊のもので、本冊の文と

A: 何について^{はっぴょう}発表する?

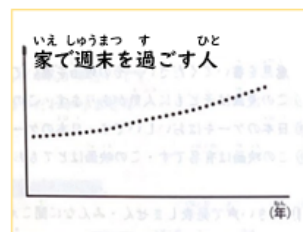
B: テレビで見たんだけど、ペットを飼う人が^かすごく^ふ増えているんだって。

.....

A: インターネットで^{しら}調べたんだけど、
最近、家で週末を^{さいきん いえ しゅうまつ す}過ごす人が^ふ増えてきたんだって。

家で週末を^{いえ しゅうまつ す}過ごす人が^ふ増えたために、
ペットを飼^かい始める人が^ふ増えてきたんだって。

B: うん、そうだね。これからも^ふ増えていくと思う。



ほぼ同じなので、学生が簡単に答えられると思ったが、結局違うことになった。ので、「あーこういう文法、勉強したな」と想起させるという目的で実施すべきである学生がまだ使えない、定着していないからこの復習授業があるので、ここでスムーズに出てくれば、この授業は必要ないわけである。なこと、待ちすぎないことが重要なのである。最初は文法項目を見つけさせることだけしておいて、この授業の最後に同じ会話を使って自分で言えば、「授業の最初できなかつたことができるようになった」という実感も持てる。そのように「材料」の使い方を変えればいいのかもしい。

②学生の発話意欲を引き出すことと動機付けには成功した。

前半は、学生が考えて発話することが多く、教師が学生の発話内容の「内容」に大げさなくらいに反応していたりして、うまく学生の話そうという意欲を引き出している。また、学生が発話する際に、その学生に近づいたり、うなずきながら学生の顔をしっかりと見て、「あなたの言うことを聞いているよ、理解しようとしているよ」というサインを送った。それも学生の発話意欲を出すことに役に立つ。学生の話そうとする意欲を引き出すことは、その場の雰囲気をよくするだけでなく、「日本語でのやりとりをもっとできるようになりたい」という動機付けに働きかけることにもなる。

③既習項目と結び付くことに成功した。

ちょうど学生が第4課の言葉（タオル）を出したので、その場で「第4課で勉強した言葉ですね」と言った。既習項目を把握し、「第〇課で勉強しました」と言えることは学生の復習の寄り所を提供できるのはなく、教師がきちんと全体像を頭に入れていることも伝わる。

④学生の答えにはっきりフィードバックすることに成功した。

以下のように答えが唯一ではない問題もある。そのような問題であれば、学生が出した

が**できる**んだって。

動詞普通形
イ形容詞普通形 + なんだって
ナ形容詞・名詞 + な

① 新聞で読んだんだけど、**今年**は**長い**スカートが**流行**しているんだって。

② テレビで**昨日**、**沖縄**で**桜**が**咲**いたんだって。

③ **雑誌**で読んだんだけど、**駅前**に**新しい**デパートが**でき**たんだって。

④ **エレナ**さんに聞いたんだけど、**来月**、**スマイル**の**コンサート**があるんだって。

⑤ インターネットで見ただけど**さくら**大学の**入学試験**の方法が**変**わるんだって。

⑥ 友達に聞いたんだけど、**やま**と**駅**の**近く**の**イタリア**料理の**レストラン**は**おい**しいんだって。

答えとスライドに記入してあるものとは違うこともよくある。その場合では、スライドに

記入してあるものだけでなく、学生の答えも「間違っているわけではないです」とはっきり言うといい。スライドに示していることはあくまでも参考になるものだからである。

⑧学生の発話をもう少し拾うことは次の課題である。

最初のウォーミングアップでは、天気をネタにし、「最近暑いために、熱中症にかかる人が多いです」という文を学生に言わせたかった。ところが、「増えています」と言おうとしている(言っている)学生がいるにもかかわらず、スルーして「多いです」と言わせてしまった。授業の最初では緊張しすぎて、どうしても教案通りに授業を進めようとした。しかし、学習者の発話ではできるだけ拾い、生かすことが大切である。

⑨最後の挨拶では、後の見学者も前に出て挨拶ができればいい。

振り返りと改善点

①時間管理が結局うまくできなかつた。どのぐらいの内容がどのぐらいの時間でできるかを把握できないので、最初から時間に対して多めの内容を用意したのである。しかし、その根本的な理由は時間に応じて内容を捨てなかつたことにあると考えている。せっかく用意した内容をカットすることは勇気が要るが、時間管理において非常に重要である。

②ひらがなの書き順はチェックが足りず間違えることがあった。今まで非常に適切に使っているが、やはり教育側になると学び直して正しいことを学生に教えないといけない。

4. 4. 6 杜保娣

初回授業の内容と状況

4月20日に『ことばノート』の第2課を担当した。第2課は「楽しいショッピング」をテーマにして、「買いたいものがどこにあるのかや値段など自分か知りたい情報を聞くことができる」こと、「レストランなどで食事する際、一緒に行った友達や店の人などとやりとりすることができる」ことが目標である。『ことばノート』ではその目標ができるように、「ズボン」、「コート」「ゆびわ」などの商品の名前、「期間限定」、「タイムサービス」、「半額」など売買に関する店舗活動を表す言葉、そして「注文する」、「配達する」など食事する際に使う言葉を学習する。

最初からもずっと緊張していたが、幸いなことに、積極的に授業に参加する学生のみんなのおかげで、時間の配分に注意しながら、大体計画通りに授業をすませた。しかし、全体の時間配分はできたが、教案の内容には偏りがあるので、問題ごとに使う時間に注意が足りず慌ててしまった。

古川先生からのコメント

①教材の中に設けられた問題の目的についての理解はあまり深くない。

本来の目的からずれてしまったことがある。まず教材にある問題をちゃんと理解し、ずれのないように確認しておくべきである。また、生教材など、理解を深めるものはいいが、出す前にちゃんと何を教えるかをチェックする必要がある。特に、以下の『ことばノート』第2課の3番目の質問では、自他動詞に注目するのではなく、むしろ動詞と一緒に使うコ

3. 一緒に使わない言葉を1つ選んで×を書きましょう。 ～ **動詞**

- 例) [ソース ・ ~~パン~~ ・ しょうゆ ・ カレー] をかけます。
- ① [切手 ・ 写真 ・ ~~ポット~~ ・ チラシ] をはります。 **貼ります**
- ② [~~車~~ ・ バス ・ 車 ・ 自転車] がうごきます。 **動きます**
- ③ [意味 ・ 読み方 ・ ~~おさん~~ ・ 使い方] をせつめいします。 **説明します**
- ④ [荷物 ・ スーツケース ・ ~~送料~~ ・ 親子丼] をはいたつします **配達します**
注文します
- ⑤ [サンドイッチ ・ ~~サズ~~ ・ 牛丼 ・ ハンバーグ] をちゅうもんします。

ロケーションの方がより大事だと言える。(授業をした時、そもそも説明する必要のない自他動詞の使い分け及び動詞の種類において非常に工夫したが、一緒に使えるコロケーションにはあまり注目していなかった。)

② (学習者が変なところに注目するするかもしれないから)、答えられるように事前に全部調べておくべきである。

例えば、最後に、『ことばノート』で最後に自由会話のために設置された「もっと話そう」のところでは、ショッピングする際に使用される品物を練習させるために、以下のスーパーのチラシを準備した。そして、学生に見せながら、学生同士で質問し合わせる予定だ



ったが、準備不足のため、第2課の目標に関する方向へ誘導できなかった。

③言葉の使い方と読み方など、1 つずつ確認すべきである。間違いが出たら、後で必ず自分で訂正しなければならない。わからないことがあったら、自分で調べて忘れずに授業で

説明しなければならない。(例えば、「ハンバーガー」と「ハンバーグ」という2つの言葉を授業で混同してしまった。古川先生からのコメントをもらって、授業後、学生の前でもう一度説明して訂正できた。)

④イラストのデザインに配慮すること。

パワポの漢字を大きくする(小さいと、ある非漢字圏の学習者にとっては難しい)、フォントにも注意すべきである。

⑤復習テストやできる2の練習を行う時、教室を回り、指摘程度での特別指導をしたほうがいい。「復習テスト」と「できる2」の部分は学生が授業中に完成させるのに時間を与えられたものである。復習テストをやっていた時、教室を回って学生が前の週の内容に対して、どの程度で把握していたかなどの状況を注意したほうがいい。授業をする週の学習内容の確認も同じである。しかし、私は教室を回ったが、意味がない歩き回ることが多すぎて、学生の指導の必要性を考慮せず、授業中即時のコミュニケーションの機会を多く逃していた。

鷺見先生からのコメント

①教壇に立つ際には、教案の役割を正しく理解すること。

私は授業の最初で下を向いていた。教案を見ながら話すのではなく、教案を見てから顔を上げて話すだけでも工夫すべきである。また、教案のどこを見たらいいかわからなくなるとより下を向く時間が長くなる。教卓の上に大きな字で何をするかだけを順に書いたメモを置いておくとか、教案をカード式にしておいて、手元で見て、それが終わったらすぐにくっつけて、次は何かがわかるようにしておくべきである。

②質問が投げかけられた学習者が回答した後のやり取りを改善すること。

5番目の質問では、「とくに」と「とくべつな」の使い方及び使い分けを明確にするために、以下の問題③をあげている。答え合わせをした後で、「とくべつな」も理解させるために学生に「〇〇さん、とくべつな人は誰ですか?」と質問した。学生は「パパです」と答えてくれた。単に「あ、パパですね。」と返事し、また別の学生に「〇〇さん、とくべつな人は誰ですか」と聞いた。2人目の学生は「家族です」と答えてくれた。このように、学生の答えに対する反応は硬すぎて、やり取りもうまくできなかった。

③ レディースデーには女の人に [とくに ・ とくべつな]
サービスがあります。

学習者が質問に答えた後のやり取りについて、鷺見先生からアドバイスをもらった。例えば、「1人目の「パパです(お父さん)」に対しては、「あーお父さんね。わたしも父が特別な人だと思います。～さんのお父さん、わたしの・・・(?)」と本人に「父」を促す、

出てこなければ、他の学生に促すというように、まずは訂正させるべきところは訂正できるようにするといい。そして、「お父さんはすごいですか」「お父さんはやさしいですか、きびしいですか」のように、「学生の答えを受けて、質問で返す」ことによって、答えへの硬いフィードバックではなく、本物のやりとりになる。2人目の「家族です」も同じ、「そうですね、わたしにとっても家族が特別な人です」と自己開示につなげたり、「（「特別」と「特に」が学習対象だから）「特に誰ですか？お母さん？おじいさん？」「家族は何人ですか」のように質問で返すといい。

③臨機応変は難しいがとても大切である。「学生のことを知りたい」「学生に自分のことを知ってもらおう」という気持ちでいると、それによって学生の答えをよく聞いて、臨機応変に対応できることも出てくる。

④指名の際には、その学習者の顔を見たり、近づいていったりすることで、指名されたという意識もできる。

振り返りと改善点

①自己紹介の時、難しい言葉や表現（特に敬語）を使わないほうがいい。また、学生に指示する時は学生の顔を見て、教案を見ないほうがいい。

②教師が全部答えを言うより、もっと学習者に発話させるほうがいい。

③もっと学生のレベルにふさわしい例を挙げたほうがいい。例えば、タイムサービスの例（学生はそもそもその言葉の意味の理解が不十分なので）

④漢字の書き方を説明する時、「どう書きますか」と聞くより、2名ぐらいの学生に黒板に書かせるほうがいい。

⑤教師自分の答えは唯一の正解ではないことを前提として、教師は用意した答えが出なかった場合、まず学生の答えを否定ずに、ちゃんと彼らの答えを聞いてポテンシャルな評価をしたほうがいい。

⑥学生の日常生活は自分の想像するものとずれている可能性があるので、前もって対応を考えた方がいい。

⑦また、板書する時に、ちゃんと自分の立ち位置に注意しながら、どのように字を書いたのかを学生に見せるといい。

⑧次回の『文法ノート』の授業では、まずせつかく教案を作ったを細かい所まで使いたいという考えを避ける。

⑨いろいろな使用場面を想像して、「自分ならどうするか」を同時に考える。

第2回授業の内容と状況

2回目（6月22日）は『文法ノート』の第9課を担当した。第9課は「アルバイト先で」をテーマにしていて、「先輩からアルバイト先のルールを聞いたり、後輩に説明したりす

ることができる」こと、「スムーズに仕事できるように、お互いに声をかけ合うことができる」ことが目標である。『文法ノート』ではその目標を達成するために、「条件形(ば)」、「V辞書形/Vナイ形ように」、「V辞書形/Vナイ形ようにしてください」、「V辞書形/Vナイ形ことになっています」、「V辞書形ことになっています」、「ごNください/おVマス形—ますください」、「Vマス形—ますそうです」、「Vテ形おきます」、「Vましようの友達言葉」、「Vテ形しまいます」のような文法項目を学習する。

全体から見れば、前回の授業より改善できて、緊張感がだんだんなくなり、元気に授業を行った。学生もいつも通りに優しく積極的に授業に参加してくれた。

古川先生からのコメント

①ランダムに質問を投げること。

尻取りの形式は、他の人の質問を聞いて回答することを促すもので良いのだが、回答の順番が決まっているため、学生が他人事だと扱い、ほっとすると感じやすく、緊張感もなくなりやすい。そのため、ランダムに質問して読み上げるほうが、学生のモチベーションを上げるので、ランダムに指示したほうがいい。

②復習の目的・意図をもう少し意識した方がいい。

学生のレベルが違うため、低い方がわからない点より多く、もっとわかりやすく説明してほしいが、いずれにせよ復習授業なので、省略すべき所は簡略化した方がいい。

鷲見先生からのコメント

①ちょっと「もったいない！」と感じる場面が多々あった。

せっかく学生が話すチャンスを作っているはずなのに、実際に文を作っているのは自分だったり、せっかく質問をして答えが返ってきたのに、その答えを生かせなかったりしているということである。

②せっかく学習した語を学生が使っているのに、それを教師が別の言葉に言い換えてしまうのを避ける。

(自分ひとりで教えている場合はもちろん、教科書にない語を導入したらそれをしっかり覚えておくべきだし、ティームティーチングの場合にはその情報を共有し合うことで、「～先生のクラスで勉強しましたね。～さんさすが」のように、ほめて、動機付けを高めることにつながる。逆は、せっかく新しく覚えた語を使ったのに、という気持ちにさせかねない)

③学生の作った文を、それを生かさず、自分の想定した文に言い換えてしまうのを避ける。

(誤用など学生にとっては「???」で消化不良になってしまう。日々教師も日本語につ

いての知識を更新して、誤用・不自然さにうまく対応できるように力をつけていかなければならない)

④意味のない動きを避ける。

(意味をもって立ち位置を変えるのはいいが、意味のない無駄な動き(例えば、あちこち歩いたりする)は、学生が落ち着かないし、学生にとってみればそこに何か意図があるかのように感じて気になってしまう)

振り返りと改善点

①全体から見れば、前回の授業より改善でき、緊張感がだんだんなくなり、元気に授業を行った。しかし、時間管理に問題があり、後半の問題(特に文法2の間9,11,12)は答え合わせぽくになってしまった。また、今回は、よりわかりやすい説明で授業を進められるようになったことに、教師としてのやりがいを感じている。

②(1回目の授業で混同していた)「ハンバーグ」と「ハンバーガー」の意味をさらに強調した(詳しくは初回授業では「古川先生からのコメントの③」のところに書いた)。学生に前回の授業の記憶を呼び起こし、この間違いを再び直すことで、学生はよりしっかりと覚えることができた。

③しかし、学生への対応がやや遅く、反応に気づかず、聞き取れないこともあるし、質問・やり取りによっては良いフィードバックができなかったこともある。よりよいフィードバックのしかたは次の課題である。

④また、作った文法カードに問題それぞれ1つずつの所要時間をマークし、スマホでも時間を記録していたが、後半は時間管理が混乱した(時間があまりないと誤解した)。そのため、授業中、焦らず、予め決められたスケジュールをたどり、タイミングツールを使う場合は、予め慣れておく。そして、事前の模擬授業を徹底的にやるべきである。

4. 3. 6 範俊梓

初回授業の内容と状況

4月27日に、『文法ノート』の第3課を担当した。第3課のテーマは『私の目標』であり、「～たら」「意向形」「～意向形＋と思っています」「～つもりです」「～んです」などの文法項目がある。授業を行う二週間前から教案を作り始めた。問題になる項目、例えば、「～んです」の説明方法と教え方など、実習一週間前の見学を機に、清水先生に尋ねた。

初めての授業で文法を教えるのは、心細かったため、準備段階では、教案とスライドの用意だけでなく、事前演習も何回をした。見学で見た授業現場をできるだけ再現し、学生たちの練習時間・質問に答える時間・考える時間・冗談を言う時間など、様々考慮に入れ

た。しかし、準備できなかつたこともあつた：電車だつた。授業当日、元々3 限目だつたが、電車を間違えて遅刻した。見学の実習生たちと事前に連絡を取つて、古川先生に3 限目の授業を頼ませていただいた。

初めての授業だが、教壇に立つと、授業前からの緊張は一切なくなつた。というより、緊張する暇がなかつた。考えていたのは、授業をうまくやりたいことだけだつた。学生の様子や自分の話し方などに気を付ける暇もないぐらい、必死に授業を進めた。

教案の内容は多すぎるため、重要なところだけ教材に書いて、教材を持って授業を行った。自己紹介をした後、すぐ第3 課のテーマ『私の目標』と関連する話題を提起し、ウォーミングアップをした。そして、文法項目ごとに授業を行った。文法の重要さと難易度により、説明と練習の量も変わった。重要な文法だったら、場面を作って説明したり練習させたりした。簡単な文法なら、答え合わせだけをするこゝもあつた。時々残る時間に合わせて調整することもあつた。

古川先生の授業（3 限目）は少し伸びてしまつたので、時間が想像より少なくて、ペースを調整しながら授業を行った。時間をコントロールするため、スマホでストップウォッチを設定し、一つの問題が終わったらラップを押すことをした。問題ごとにどのくらい時間がかかつたかすぐ分かるぐらい便利だつた。

時間的には計画通りだつたが、復習という授業目的が頭に入つていなくて、学生に練習させる時間は少なかつた。

古川先生からのコメント

- ①時間配分をちゃんとできていて、授業中に常に調整していた。
- ②あまり緊張しておらず、テンションも高く、予定通りに授業を行ったと感じる
- ③授業の目的は復習なので、できるだけ学生たちに発話させる必要があるが、シーンをうまく設けず、文法を説明したり、自分で答えを出してしまつたりして、学生にとって練習になつていなかつたところがあつた。
- ④質問の仕方はもうちょっと練つた方がいい。例えば、「皆さん将来何をしますか」と聞いたら、何を答えればいいのか（文法項目を使って答えるかそのまま答えるか）わからない学生がいた。学生にとつても混乱しやすい状況である。
- ⑤板書をした時、書いている内容を遮つてしまつた。学生を向き、横に立つて書いたほうがいい。そして、漢字の場合は読み方も書いた方がいい。

鷲見先生からのコメント

- ①声もよく通り、落ち着いて、笑顔を見せながら話しているので、とても聞きやすい。
- ②教案を頭に入れて、授業に臨んだこともよかつた。

③学生を指名して、教科書の質問に答えさせるとき、答えている学生の顔を見たほうがいい。また、立ち位置について、右側のほうに体の向きが向きがちなので、左側（廊下側）のほうに少し顔や体の向きを開くことも意識するといいい。

④答え合わせとしては、順調にできたが、自分が言うのではなく、「質問する」を心掛ける。時にはその答えにさらに「質問する」ということをやってみるといい。

⑤絵をスライドで見せて注目させることには成功している。ただ、ちょっと焦点がわかりにくかったように思う。学生が持っているものや着ているものを利用して、理解を促す（確認する）ことができる。

⑥授業が突然終わっているので、今回は「クロージング」を意識すること。

振り返りと改善すべき点

授業前はちょっと緊張したが、学生は優しい人たちなので、すぐ仲間になれるようになった。笑顔で接すれば、すぐ笑顔で返事してくれる。授業が終わっても、日本語学習の悩みについて話したり雑談したりしていた。そして、皆授業に積極的に参加して、質問があればすぐ自分に聞いて、教師としてかなりの達成感を得た。

しかし、改善すべき点も多くあった。

質問の仕方が少し硬くて、学生たちにとって答えにくいかもしれない。その時、対象文法項目を使わせることができないのもならず、普通の対話も難しくなった。そして、説明のやり方も問題があった。自分が文法用語ばかりで説明して、場面をうまく使っていないことがあった。また、立ち位置もスクリーンに近くて、ドア側の学生に配慮できなかった。板書を書く時も、黒板に近すぎて、筆順をみせることに気を付けていなかった。それぞれが、今後の課題である。その中、最も重要なのは、「復習」という授業目的を意識することである。今後、いちいち説明するより、もっと適切な場面を考えて、学生が復習項目を練習できるように工夫する。準備段階では、学生が産出できない場合の対応も考える必要がある。

2回目授業の内容と状況

2回目の授業は7月6日に行った。授業内容は『ことばノート』第12課だった。テーマは『私の健康法』である。前回の文法とは違い、「ストレス」「たまる」「胃」「元気」など、健康に関する言葉の復習授業である。今回も授業2週間前から教案とスライドを作り、実習2、3日前に事前演習も行った。

1回目の経験があるが、改善すべきことがあるため、前より緊張した。今回は学生たちのテンションが前回より高いため、達成感があった。そして、授業を進める以外のことに注意する余裕も少しあった。

文法の復習授業と違い、学習項目の意味を確認した後、関連用語もイラストや身振り手振りで説明した。日本語のレベル不足で、説明しきれないところもあったが、全力で試した。例えば、「カロリー」を説明する時、食品包装にある「熱量」のところを見せたりした。最後はクロージングとして、当日復習した語を選んで、埋め込み問題を設けた。クロージングのスライドには間違いが出たが、即時に訂正したので、学生たちをミスリードしなかった。

授業中には、学生たちに発話できるように質問するようにした。学生たちから予想外の回答ももらったが、それを機に、できるだけ学生と会話できるように頑張った。この点については、前よりうまくなったが、単語での返答が多かったため、質問の仕方を更に練る必要があると思う。

今回は、前と同じように、時間配分はよくできていた。立ち位置や話させることにも気を付けて授業を進めた。しかし、改善すべきこともまたある。

古川先生からのコメント

①前回と同じように、時間コントロールがよくできた。ちゃんと授業を客観視できた。

②できるだけ、学生たちが面白く思うような内容を用意したので、学生たちとちゃんとやり取りをしながら、授業をした。事前に想定外の答えが出る時の対応も考えたので、不十分なところがあるが、焦らずに対応できた。

③板書をする時、ちゃんと横に立って、学生たちがどうやって書いているのかを見えるように気を付けた。立ち位置も考えながら、一つの場所に立って授業をすることを避けた。

④学習項目の関連語についても教えて、内容が充実していた。もうちょっと補足してもいい。

⑤学生たち全員への質問が多かった。この場合は、誰が答えればいいのかわからなくて、学生たちを迷わせやすい。また、いつも授業で活躍している学生だけが質問に答えて、あまり話さない学生にとっては練習になっていなかった。

⑥言葉の意味を確認する・やり取りをする時、説明になってないところがあった。その時、身振り手振りなどで見せたらいいかもしれない。また、学生たちがこれからの生活の中で使う可能性が高い語は、もっと場面を提示して、ことばと場面に関連させると、理解しやすい。

⑦スライドに間違いがあった。すぐ気づいて、その場で学生たちに言ったが、今後、このような間違いが出ないように気を付けるといい。

鷲見先生からのコメント

①学生とのやりとりが増えている。学生の顔をしっかりと見ながら、学生の発話に「えー」「へー」のような相槌も打っているので、「単なる単調な答え合わせ」を脱出できている。しかし、まだ学生の発話は「語」レベルのものが多い。

②指示が明示的なところがある。例えば、質問に入るとき、はっきりと「質問です」と手も使って示している。

③日本語力のさらなる向上に努める。アクセント、語や文法の使い分けなど、明確に意識していないところがある。

④語の形だけでなく、どのように使うのかも理解させ、使えるようにした方がいい。

振り返りと改善した点

今回はできるだけ教壇の真ん中に立って、学生に顔を向けて話すことに気を付けた。板書をする時も、書き順を見せるように配慮した。今後は、教室を回りながら授業をする余裕を持てるように頑張る。

また、学生に発話させることに工夫した。しかし、自分が難しいと思う項目が、つい口頭での説明になった。しかも、自分の日本語レベルに制限され、うまく説明できなかったこともあった。今後、様々な可能性を考慮に入れて、授業前の準備をもっと細かく行うべきである。そして、学生に発話させることも、単語レベルに止まったので、今後はどうやって学生に文で発話させるかを考える必要がある。

もう一つは、自分の日本語は不安定なところがあり、ちゃんと話せる時もあるが、途中で詰まってしまう時もある。日本語レベルを上げなければならないと痛感した。

5. 授業評価

各授業に関する学生の声を聞くために、学習者アンケートを実施した。5 節ではアンケートの作成から結果までの流れを記述する。

5. 1 アンケートの作成

第2回目の対面授業(6.14 水3限)の前に、昨年度の評価アンケートに基づき、各自で質問を考えて作成し、それを授業に持って行った。鷺見先生のアドバイスをもらい、質問項目を分類し修正した。結果として、2部に分け、第1部は「学生自身」と「授業」からなり、それぞれ6問と8問を作った。第1部は全て5段階評価の客観的質問である。Aは最高評価で、Eは最低評価である。

「学生自身」の部分において、授業参加（授業前・授業中・授業後）、授業内容への関心と理解、日本語学習への影響、満足度などの側面から質問した。

「授業について」では、授業活動の各側面（板書、画像、スライド、教師の話し方、時間配分、やりとりの仕方、授業中の教師の状態）と復習テストという2点から質問を作成した。

第2部では、授業についての「いいと思う点」、「先生へのメッセージ」、「先生へのアドバイス」に関する学生が自由に書ける主観欄である。自由に感想などを書いてもらえるように、使用言語は日本語・中国語・英語のいずれもいと提示した。

具体的な質問項目は別表1で示す。

5. 2 アンケートの実施

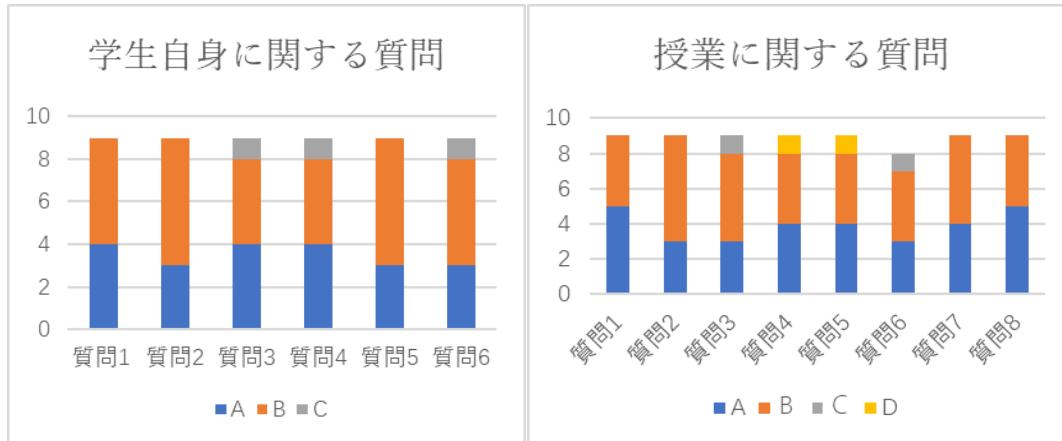
実習生は2回目の授業後に各自で実施することになった。6月15日、6月22日、6月29日、7月6日、7月13日、7月20日、7月27日に各々実施し、合計7回であった。本来はあらかじめお願いしておくべきであったが、昨年度の実習でもアンケート調査を実施したため、今回は実習生から古川先生に特に学習者アンケートのことを伝えるのを怠ってしまった。今年度は学習者アンケートの内容が昨年度のと似ているが、実施形式がだいぶ変わったので、丁寧に古川先生にアンケートの実施目的、内容、実施と回収のタイミング（2回目から実施すること、3限と4限の間の休憩時間を使って学生に書いてもらうこと、4限の授業の前に回収することなど）に伝えたほうがよかった。アンケート実施1回目の授業では学生にアンケートの協力をお願いして、その次の授業からは「アンケートをお願いします」と一言伝えて、学生たちは積極的に書いてくれた。

5. 3 アンケートの結果

本節では、実施の日付別にアンケートの結果を示す。客観テストの結果はグラフで、主観テストの結果は表で示す。全体的に、客観テストにおいてAをつけたことが多い。主観テストにおいて、無記入が多い。結果を示す際には、学生が書いてある分のみを示す。無記入が多いという点に関しては、5.4の振り返りで反省を記述する。

6月15日のアンケート（担当者：杜保娣）

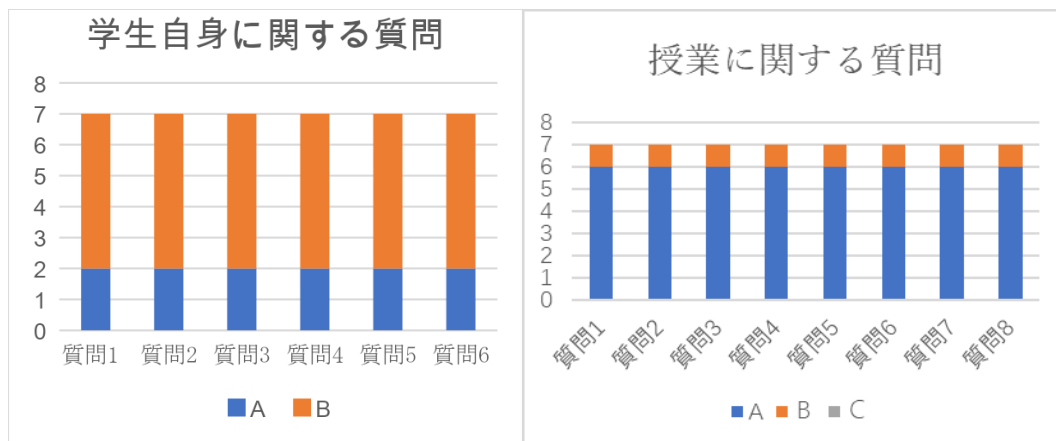
全員出席なので、合計9部である。



いいと思う点	<ul style="list-style-type: none"> • 好理解(わかりやすい)、おもしろい • 詳しい。
先生へのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> • いいです。 • ない
先生へのメッセージ	

6月22日のアンケート (担当者: 王肖)

1名が欠席で、1名が提出してくれなかったため、合計7部である。

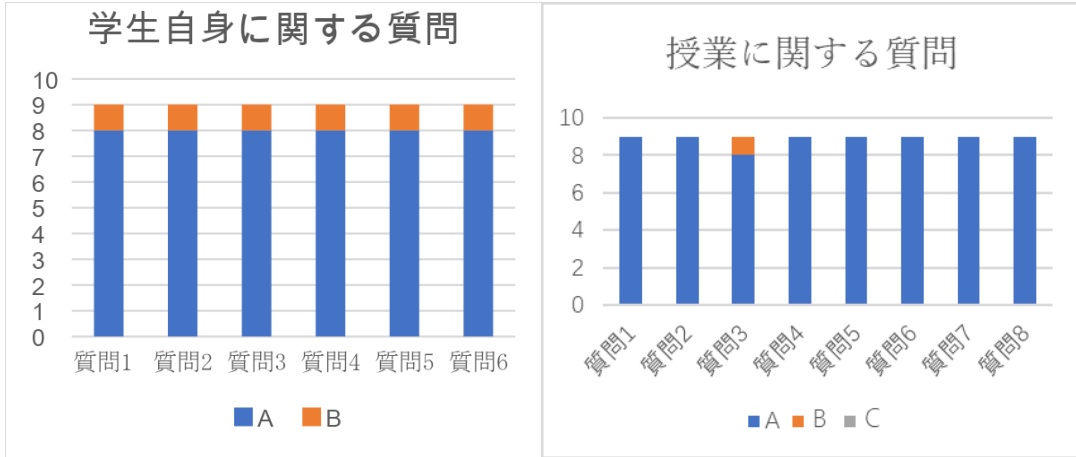


いいと思う点	<ul style="list-style-type: none"> • もうとてもいいですよ • 分かりやすい • おもしろい。皆さんは全部さんかしました
先生へのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> • ない、すてきです
先生へのメッセージ	<ul style="list-style-type: none"> • すばらしい

	<ul style="list-style-type: none"> • すばらしい
--	---

6月29日のアンケート (担当者: 王嫻)

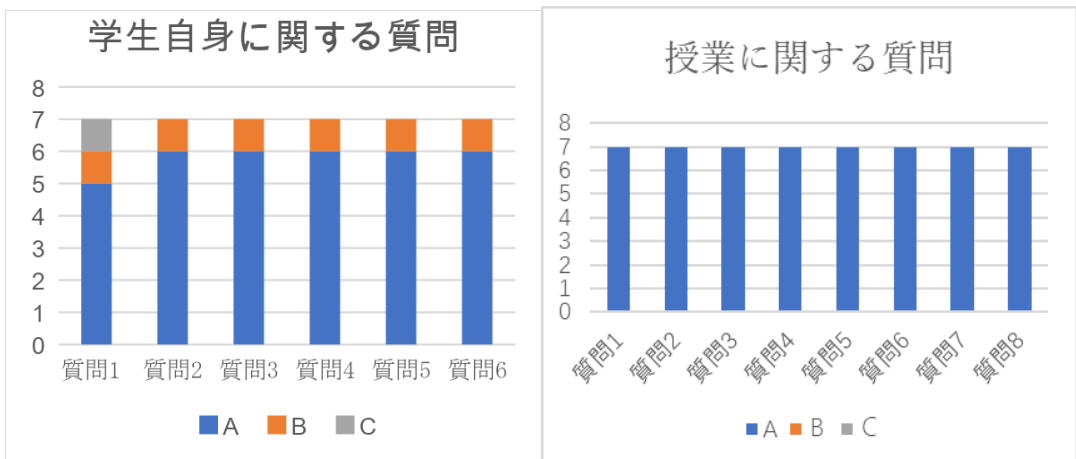
全員出席なので、合計9部である。



いいと思う点	<ul style="list-style-type: none"> • 板書很好 (板書がいい) • しっかり話します
先生へのアドバイス	
先生へのメッセージ	<ul style="list-style-type: none"> • すばらしい

7月6日のアンケート (担当者: 範俊粹)

2名が欠席したので、合計7部である。

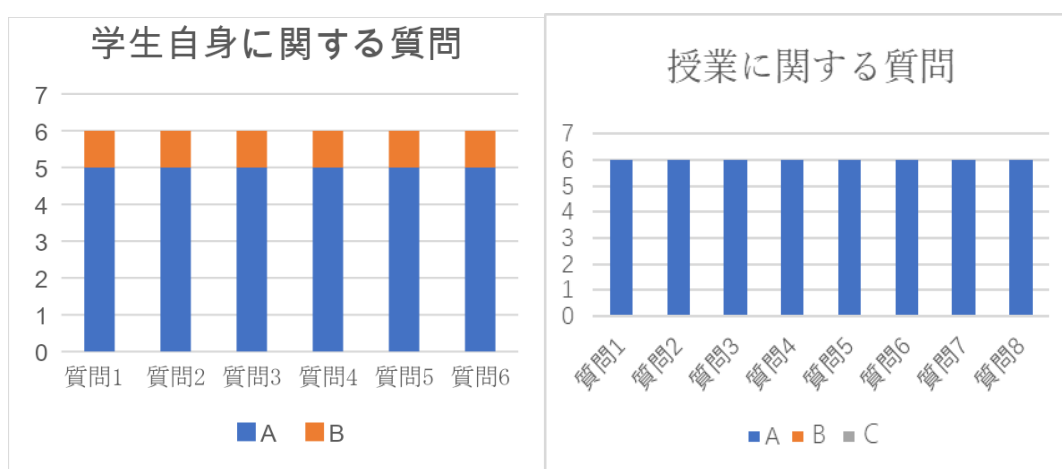


いいと思う点	<ul style="list-style-type: none"> • 节奏感很好, 不会无聊 (ペースよくてつまらないとか感じなかった) • 别的单词的说明 (ほかの単語の説明)
--------	---

	全部
先生へのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> • すばらしい
先生へのメッセージ	<ul style="list-style-type: none"> • すばらしい

7月13日のアンケート (担当者: 宋幹秘)

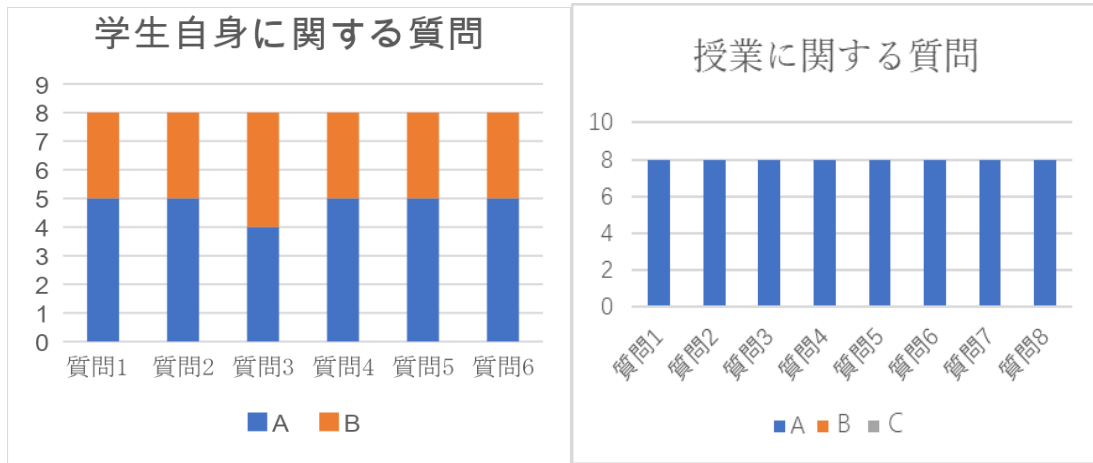
2名が欠席で、一部が紛失したので、合計6部である。



いいと思う点	<ul style="list-style-type: none"> • 全部おもしろい • 教課节奏 (授業のペース) 题目拓展 (当該問題に関連すること) 讲的也很清楚 (説明が分かりやすい) ✿
先生へのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> • ない すてきですから • ない
先生へのメッセージ	<ul style="list-style-type: none"> • いいです

7月20日のアンケート (担当者: 王妥妮)

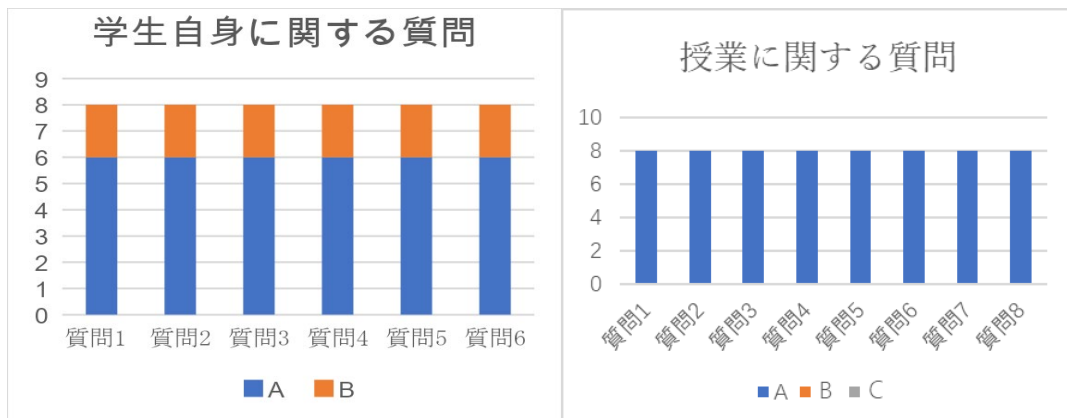
1名が欠席したので、合計8部である。



いいと思う点	<ul style="list-style-type: none"> • 全部 • とてもいい☺ • 詳しくてわかりやすいです。
先生へのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> • ない • ない
先生へのメッセージ	<ul style="list-style-type: none"> • とてもすばらしい

7月27日のアンケート（担当者：翟首藝）

1名が欠席したので、合計8部である。



いいと思う点	<ul style="list-style-type: none"> • 全部おもしろい • 谢谢大家用心的给我们讲题（先生の皆さんが心を込めて授業をしてくれてありがとう）。ありがとう～☺
先生へのアドバイス	<ul style="list-style-type: none"> • ない、先生の授業はすてきです

先生へのメッセージ	<ul style="list-style-type: none"> • てきしゅげい生（誤字）生（さん）の将来に幸運を祈ります。 • とてもすばらしい
-----------	--

全体的に見ると、授業に関する学生の評価がよい。基本的に A とつけてくれた。「学生自身」の部分については、ある学生が謙虚かと思ひ、基本的に B とつけた。主観テストにおいてもいい評価が多い。

5. 4 振り返り

全員のアンケートを振り返ると、以下の2点に気づいた。

1 つ目は学生が気になる点である。主観テストを見ると、学生は主に授業のペースの良し悪し、説明の分かりやすさ、教科書の学習項目に関する練習や説明、授業の面白さといった点から評価している。授業中では教師が授業の流れや学生の声を拾うこと、時間配分に気を取られて、ペースの良し悪しを意識できないことがある。しかし、学生側はきちんと感じている。すべての問題を詳しく説明するのではなく、単なる答え合わせをするのではなく、学生が疲れていそうな顔をしていたら少し興味を引きそうな内容にスイッチすることなどで、ペースのよい授業ができるかと考えられる。特に古川先生の授業を見学したらそのように考えたのだが、教師一人一人に自分のペースもあるのではないかと考えている。

2 つ目は学習者アンケートの改善点である。まずはアンケートで使われる言語である。冒頭にあるアンケートの実施目的も評価項目もできるだけ簡単な日本語を用いたが、日本語力の低い学生が理解できない可能性はまだある。その影響を排除しきちんと評価してもらえるように、中国語訳を付けたほうがいいのかもかもしれない。次はアンケートの実施時間である。今回はどのアンケートでも主観テストの部分の記述が少ないように見えた。指示文の日本語が理解できないため、中国語でも回答可能であることがわからないのは理由の一つかもしれないが、休憩時間が取られて学生が嫌に思っており適当に書いたのも一つの理由ではないかと考えられる。もし可能であれば、アンケートの実施も授業の部分として入れて、クロージングの後に実施したほうがいいのかもかもしれない。

6. 授業感想

6. 1 王嫻

学生とのやりとりを増やすこと

日本語の教師になるというのは大学時代からの夢だった。以前はオンライン授業の形で中国語を使って日本語を教えたことがあったが、これまで一度も日本語で教える経験はなかった。自分の日本語能力への不安と同時に、夢に一步近づいた喜びを胸に、教育実習に取り組んだ。

本番の実習を始める前に、実習生全員が中日本自動車短期大学に訪れ、見学した。古川先生の授業を見学した際に、もっとも印象に残ったのは先生と学習者のやりとりだった。古川先生が日本文化について教えたり、中国にいたときのエピソードをシェアしたりして、授業に笑いが溢れていた。古川先生の授業を見て、初めて「教えることは単なる一方通行の行為ではなく、学生とコミュニケーションを通して成り立つものだ」と認識した。自分が授業を行う際にも、必ず学生とのコミュニケーションをたくさんとろうと決心した。

しかし、実際に授業を行うとき、教案作成の際に予想していなかったことがたくさんあった。学生に対して質問をしたら、指名された学生がとてもやさしく協力してくれて、応答してくれたが、緊張のあまりに聞き逃してしまったことがあった。学生の応答が聞こえたとしても「そうなんですか。」や「そうですね。正解です。」といった浅いフィードバックに止まった。授業の録画を振り返ってみると、私がやったことはコミュニケーションというより、単なる答え合わせであったことを痛感した。

学生とのやりとりを増やそうという気持ちが山々だが、具体的にどうしたらいいのかはわからなかった。その時、私の授業の様子を見てくださった驚見先生と古川先生から貴重なアドバイスをいただいた。それは、学生の発話の形にだけでなく、内容に関してもフィードバックすることである。学生の応答を受けて、それについてさらに掘り下げて質問することで、内容に興味を示す。

2回目の授業に向けて、「応答にさらに質問」という方法を意識して、教案を作成し、授業を進めた。しかし、すぐに新しい問題に直面した。それは、学生が質問の意図をわからなかった場合、どのように質問を変えたら理解してもらえるかという点だった。同じ学生に引き続き質問をした方がいいのか、それとも効率のため、ほかの学生を当てるかという問題もあった。

実際に「応答にさらに質問」を実践してみた結果、これは単にやりとりを進める簡単な一歩だけではないことに気づいた。学生の発言が教科書から離れるにつれて、フィードバ

ックもさらに難しくなる。そこで、教師は臨機応変な能力、落ち着いて学生の発言を把握する勇気、誤用に対応する語彙力に頼るしかない。これらの能力を同時に発揮するために、普段からの積み重ねが不可欠だ。今の私にとってはまだ難しいが、今後の課題として、教師として必要な能力をさらに鍛えていきたいと思う。

最後に、常に心の支えとなってくれたほかの実習生に感謝の気持ちを伝えたい。彼女たちのアドバイスや温かいことばがなければ、授業がうまくいかなかったという落ち込む気持ちから回復することが難しかったと思う。そしてお忙しい中貴重なご意見をくださった鷺見先生、古川先生と清水先生にもお礼を申し上げる。いただいたアドバイスを大切にしていって、これからも日本語教師という目標に向かって努力していきたい。

6. 2 王肖

新鵜沼駅へ

今回の実習先は岐阜県にある中日本自動車短期大学(略称:中日本)である。実習先に行くには、まず地下鉄に乗り、新鵜沼駅で下車して中日本の学校バスに乗り換える必要がある。最初この駅名を見たとき、沼地に落ちている鳥のことを思い浮かべた。

期待と不安を抱きながら初めて見学に行くときのことは今でも覚えている。また、学生に力や安心感を貰えるとは全然思っていなかった。名古屋大学から新鵜沼駅までは1時間ぐらいかかり、途中、実習生皆で乗り換えの路線を探したり、地下鉄を待ったり、乗車してから仮眠したりしていた。駅に到着して暫く待っていると、赤い学生服を着ている学生の姿が見えた。中日本の学生たちであった。彼らに従って無事に学校バスに乗り換えた。少々安心した。見学の間、学生たちの学習状況や学習意欲が伝わってきた。積極的で熱心であった。恵まれた環境で教育実習をすることができて本当にありがたかった。私が担当した授業では学生たちの熱意がよりダイレクトに感じられた。説明不足であっても、学生たちはできる限り理解して授業に協力してくれた。「故に弟子は必ずしも師に如かずんばあらず」という漢文があり、彼らからは教師としての自分の至らなさを感じずにはられないし、学生としての至らなさも痛感した。

教師としての至らなさと言えば、幸いなことに参考となる模範授業があった。見学した授業では、清水先生が新規レッスンを担当され、古川先生が復習レッスンを担当された。両先生とも非常に豊かな教育経験を持たれており、大量の知識を蓄えられており、教室内で必要に応じて臨機応変に運用されていた。私は駆け出しで直接法を用いて授業をする経験もない。2回の実習授業に共通の欠点は、教案の準備不足であった。教案は授業の根幹で鷺見先生にもいろいろコメントしていただいたが、よく修正できなかった。学生の応答から知識の定着度を考察することが重要であった。しかし、どのような質問をすれば、学生に自然に発言させたり、回答させたりできるのかが分からず、十分な練習をさせなかつ

た。関連する知識ポイントを含む使用場面を柔軟に活用することが必要なので、積み重ねがなければ適切な質問は出せない。また、知識ポイントの本質的な使い方が分からなければ、適切な使用場面を思い浮かべることができない。これらの問題は全部連鎖しており、授業効果に直接関係している。まだまだ知識が足りないの、これから少しずつ積み上げていく必要がある。辛抱する木に金になり、今回の教訓を次に活かして粘り強く頑張っていきたいと思う。他には、今回の教育実習において多大なるご支援とご指導を賜った先生方に、心より感謝申し上げる。

実習先からの帰り道も非常に忘れられない。帰り道では意見交換を行い、深い交流を重ねた。収穫は非常に多かった。今回は、多くの実習生と一緒に助け合い、分かち合うことができて本当によかった。

振り返ると、湖沼に群生する鶺鴒の姿が目についた。

6. 3 王妥妮

初めの一步

以前の日本語教師の経験は、高校で大学入学試験向けの日本語授業を半年間担当したことである。今回の日本語教育実習は、自分にとって大きな挑戦である。その理由は、日本語で学生たちに日本語を教えるのは初めてだったからだ。最初は不安だったが、自分にとっては大きな挑戦であり、不安よりも新しいことに挑戦できる興奮が胸にわき上がっていた。

初めて実習生たちと一緒に中日本自動車学校を見学に行った時のことを、今でも鮮明に覚えている。まずは古川先生と清水先生の授業を見学した。一方的に日本語の文法や語彙を学生たちに押し付けるのではなく、どのように学生たちとコミュニケーションをとり、自然な形で文法や語彙を使いながら身につけさせるかが重要だということがわかった。二人の先生の授業を見学したことで、自分も教案を作成する際のヒントを得ることができた。また、学生たちはハイレベルの日本語力を持っており、自分は本当にうまく指導できるのかについて不安だった。

初めての授業では、正直なところうまくいかなかった。学生たちに文法を使って発話させることで、自然に身につけさせる方法は理解していたが、実際に行う際にはまた単に文法や語彙を押し付けるだけだった。つまり、私は授業の目標を持っていなかったのだ。2回目の授業に向けて、初めての授業の反省を踏まえて改善を試みた。まず、教案を作成する際にできるだけ多くの場面ごとの質問を考え、学生たちがどのように返答するかを予想した。結果として、まだ課題（時間のコントロール）はあるが、前回よりも改善された。学生たちとのコミュニケーションもうまく取ることができ、授業を実施してよかったと初めて感じた。

人生にはさまざまなチャレンジがあり、まずは最初の一步を踏み出すことが重要である。今回の実習は、まさに自分の日本語教師としての第一歩だと信じている。この経験がいつか自分の人生に役立つことを信じている。この貴重な実習の機会をいただき、協力してくれた学生たちや助けてくれた先生方に心から感謝している。

6. 4 宋幹秘

日本語教師としての一步へ

日本語教師として、どのような性質が求められているのか、私は常に考えている。

教師は常に学生の立場に立ち、求められている性質を見つける必要がある。そのため、教師は教師のみならず、授業を行うための学習者でもある。教師も学習者から学べるものがあるだろう。

日本語教師になるために、勿論日本語力が求められている。今回の実習では、それを強く感じた。自分が知っている知識であっても、説明できるわけではない。また、学生が疑問を持って何回も質問したら、教師は自信を失ってしまい、説明できなくなる。そのため、日本語教師になるために、高い日本語力が必要ではないか。

また、日本語教師になるために、コミュニケーション能力が求められている。教室内、日常生活のどこでも、先生と学習者の交流が溢れている。自己開示であれば、自分自身について語らなければならない。傾聴者であれば、聴く側として反応しなければならない。このような人間活動で学習者と教師とも欠かせない役割を分担している。教師は学習者にとって、知識人であり、交流の主導権を持っていると考えられる。そのため、教師はこのような交流活動をスムーズに進める能力が求められている。すなわちコミュニケーション能力である。学習者との交流ができれば、学習者との関係づくりももっと有利である。

最後に、日本語教師になるために、臨機応変の能力が求められている。教室内、答えられない質問をされる時があるだろう。全く知らない話題が出される時があるだろう。現段階で説明できない知識があるだろう。日常生活では、解釈できない現象があるだろう。異文化交流で、評価できないことがあるだろう。さまざまな解釈できない問題があり、それらに対して、日本語教師には、臨機応変の能力が求められている。さまざまな人種や異文化を尊重し、そのようなトラブルに対する対応策を全て考えておくことは非現実である。その際には、臨機応変に対応することしかできない。

経済の発展とともに、異文化交流が盛んである。コロナ禍の影響が消えていないにも関わらず、日本語を勉強している学習者が増えている。今回の実習では、媒介語を使わず授業を行った。それをもとに、日本語教師が求められている性質を考えてみた。しかしながら、もしも上級日本語学習者の教師が母国に帰って日本語を教えたら、求められている性質は異なると考えられる。

日本語教師として、どのような性質が求められているのか、私は常に考えているが、実際にその答えはまだ明確ではない。しかし、今回の実習では、学習者との交流、先生方との交流、実習生との交流で、日本語教師として努力できる方向が明瞭になってきた。一体、求められている性質は何か、さらに今後の実践で探していきたいと考える。

今回の貴重な実習の機会をいただき、大変感謝している。協力していただいた先生方、学生達、指摘していただいた先生方に感謝の気持ちを伝えたい。日本語教師としての一歩を踏み出した実習生に「頑張ってるね!」と言いたい。今後の自分に「勇気を持って探してみて!」と言いたい。

6. 5 翟首藝

たくさん走ってみよう

多人数のクラスで日本語を教えることも直接法で日本語を教えることも初めてである。最初は非常に不安であった。「日本語を間違えたらどうしよう」、「学生の質問に答えられなかったらどうしよう」、「学生が説明を理解できなかったらどうしよう」など、色々悩んでいた。しかし、今回の学生の日本語力も学習意欲も相当高いので、授業中ではきちんと指示を理解してくれたり、積極的に授業に参加してくれたりした。そのおかげで、一回目の授業は何とか無事に終わらせた。

最初に授業を準備した時に、楽しい授業や日常会話のような授業を目指したが、自分の発話量が多すぎて学生が練習する時間を取ってしまった。さらに、雑談であることが多かったので、授業の目標からずれてしまった。それで、一時的に自分が日本語教師に向いていないと思うぐらい落ち込んでしまった。ところが、せめて最後まで日本語教育実習をやり抜こうと思い、2回目の授業ではできるだけ課題を解決しよりよい授業を作ろうとした。

2回目の授業では発話量を減らすことや、本課の文法を練習し定着させること、学生の声を拾いきちんとフィードバックすることなどは改善できた。一方で、授業の時間管理は予定通りにできなかった。それについて古川先生から大切なヒントをもらった。

授業の時間管理は「駅まで走る」ことに似ている。初めて駅に歩いていく時は、その距離ならどのぐらい時間かかるか分からない。走ってみて初めて、走る時間を把握できるようになる。時間管理も同じで、経験のない私たちはどのぐらいの内容にどのぐらい時間がかかるか分からない。そのため、最初から多めの内容を用意し、すべてやると時間がオーバーすることは当然である。授業前は予想し、実際に授業をしてみて予想に合うかどうか分かる。今大事なのは、時間が足りないなら必要に応じて内容をカットすることである。簡単なように聞こえるが、かなり勇気が必要である。

大切なアドバイスをいただいたのでぜひ活かしたいと思う。今年の9月から短期大学で中国語を教えることになるが、「走ってみる」ことができる。予想と実際の差を縮め、内

容をカットする勇気を付ければ良いと考える。沢山の教育経験を持って、またいつか直接法で日本語を教えることができれば幸いだ。

6. 6 杜保娣

千里の道も一歩より

書き始めようとした時、いろいろな実習の時の思い出が浮かんだ。ガタガタした列車での中日本自動車短期大学（以下中日本）への道、中日本のスクールバスに乗った青春を謳歌する学生たちの姿、山の中を走るスクールバスのスピードに驚かされたこと、そして流れの速い川を見下ろしたときの喜びなど次々とよみがえってきた。

こ以前、中国にいた時、山東省のある高校で半年間、日本語教師として日本語を教えた経験がある。しかし、日本語を教えるのは、生活費を稼ぐために仕方なく始めた仕事だった。かつ、学習者は全員中国人なので、中国語で教えていた。いつ授業を早く切り上げられるかしか考えていなかったし、生徒に労力を注いでも結果は望んだ方向へいかず、憤慨したあげく、だんだん自信がなくなった。このまま日本語教師を続けていていいのだろうか、しばらく落ち込んだ。

だから、この中日本での実習経験は、自分にとっておおきな挑戦であり転機だった。心理的な困難及び実際の教える現場の困難を両方克服するのは容易なことではなかった。しかし、実際の授業が終わってはじめて、それまでの心配と不安の多くは大げさだったことに気づいた。

1 回目の授業では、自分にプレッシャーをかけすぎて、授業を楽しめなかったのは、非常に残念なことである。教案に頼りすぎていたため、教案を読むことから外れて授業を進めたいのに、無意識のうちに教案を読み始めていた、しかも、頭を低くして、学生さんと目を合わせない。まるで学生さんと自分を別世界においてしまったかのようだった。そして授業中にミスもした。しかし、古川先生の話が奮い立たせた。先生は「ミスをしない人はいない。長年教えている先生でもミスをする。しかし、自分自身がミスをしたら、自分で訂正しなければ、教師に対する信用度は下がってしまう。」とおっしゃった。そこで、授業の最後に間違いを訂正して、学生さんに謝り、また二回目の授業のはじめに前回の間違いに対する正解を改めて強調した。恥ずかしいというより、意外と幸せな気分と勇気を得たという感じだった。

2 回目の授業は、事前に準備した話題や対話をあまり使わなかったのが非常にもったいなかったが、授業の時間と「今、ここ」を楽しむことを学んだ。中日本での実習は、日本人教師が外国人学習者にどのように日本語を教えているのかを目の当たりにすることができ、私にとって貴重な経験となった。正直なところ、このような形や雰囲気でも初級レベル

の学習者に日本語を教えようと思ったことはなかった。日本語教育や自分の職業に心から情熱を注いでいる教師とはどういうものなのかを知ることができた。

教えるということは山に登るように、一步一步一緒に成長していくプロセスであると考ええる。そして、いつか中国に帰国して日本語教師になった時、教えることの難しさにぶつかってもくじけることなく、常に知識を深め、心を込めて教えていきたいと思う。

6. 7 範俊梓

いい教師になるため

日本語を独学するうちに、理解しにくいところや覚えられないところが出た。日本語学校に通うことによって、改善できるかと思っただが、新しい問題が常に出てきた。自分は日本語学部出身ではなかったが、そのプロセスの中で、日本語が好き・日本語学習のコツを教えたいという気持ちで、日本語の教師になりたいという夢ができた。今回の実習を通して、日本語教師になる難しさを実体験できたが、いろいろ勉強になり、いい教師になる方向性を見つけた。

実習生は計7人であり、全員現場で授業したいという想いで、中日本自動車短期大学の別科で授業を行った。皆交替しながら授業を進め、1人2回の実習機会があった。少し少ないが、皆責任を持って、ちゃんと準備してから、授業に臨んだ。そのプロセスの中、古川先生と清水先生がアドバイスしてくださったり、質問に答えてくださったり、先生になるためのことを教えてくださったりして、大変お世話になった。

授業する前に、まず古川先生の授業を見学した。先生は面白い話で学生たちの注意を集め、文法やことばの学習項目を復習していた。聞けば聞くほど、その面白さがどこから来たか分かるようになった。ただジョークを飛ばしているだけではなく、学生の関心を持つことや将来力になることについて話しているからだ。生教材も、話し方も、立ち位置も、仕草も、自分は非常に勉強になった。このような面白い授業ができる先生、学生に愛される先生になりたいという気持ちが一層強くなった。

いよいよ自分の初回実習になった。最初は緊張しすぎて、授業中に頭が真っ白になったらどうしようと、いつも考えていた。そのため、自分は本番の前に、友達に頼んで、授業のリハーサルをした。効果があった。自分は教壇に立つ瞬間、頭の中で授業の流れがはっきりしていた。学生たちも仲間のような優しい顔をしていて、自分が心強かった。よかったと思うくらい、緊張しなくなった。そのおかげで、時間コントロールもちゃんとできた。しかし、それは授業の全部ではなかった。授業後、古川先生と鷺見先生のコメントを聞いて、立ち位置や板書の書き方以外、一番問題になっていたのは、「復習」という授業目的は心掛けていない、学生にちゃんと発話させていないことだった。

そのため、2回目の授業は、準備段階からちゃんとシーンを設定し、学生たちとやり取りできるよう工夫した。前回と同じように、リハーサルもした。2回目は、学生たちのテンションが一回目よりも高かくて、積極的に質問に答えたり、自分の考えを話したりしていた。当然、改善すべき点もあった。学生たちの発話は語レベルに止まって、文になっていないことだった。そして、自分は「復習」ということが気になりすぎて、スライドにも間違いが出てしまった。さらに、学生にうまく説明できない項目も出てきて、自分の日本語レベルにもコンプレックスを感じた。どうやったら何でも考慮に入れられる完璧な先生になれるか、悩み始めた。

その時、古川先生の一言が助けになった。「誰でも最初から完璧な教師というわけじゃない。皆始まったばかりから、いろいろ失敗する。その失敗を踏まえて、また失敗しないように頑張ればいい。その経験を積み重ねて、きっと将来いい教師になる」。そう、失敗は怖くない。今の私たちは、教師の「たまご」であり、いろいろ試して、失敗して、そしてそこから学ぶという最適な時期と言っても過言ではない。失敗を恐れず、それをすべて自分の経験と養分にして、将来いつか理想の教師になれると思っている。

それが今回の実習で一番勉強になったこと。文法ではない、語彙でもない、いい教師になるという方向へ頑張る信念である。

別表

アンケート

2023年 月 日 (木)

このアンケートは、木曜日3限/4限の授業に対して、皆さんがどう感じているかについて聞きます。アンケートの目的は、教育実習を振り返り、教授法を改善することです。回答は無記名(名前を書かなくても大丈夫)で、成績評価とは関係がありません。ぜひ、ご協力をお願いします。

I. 質問を読んで、1~5のどれかに○をつけてください。

A 非常にあてはまる	B ややあてはまる	C どちらともいえない
------------	-----------	-------------

D ややあてはまらない D 全くあてはまらない

*学生自身について

1 私は授業に積極的に参加しました。

A B C D E

2 私は授業に対して、積極的に復習と予習を行いました。

A B C D E

3 私は授業内容に興味や関心を持ちました。

A B C D E

4 私は授業の内容を全部理解できました。

A B C D E

5 私は授業を受けて、日本語の勉強をもっと頑張りたいと思いました。

A B C D E

6 私は木曜日3限/4限の授業に満足しています。

A B C D E

*授業について

1 板書・画像などは見やすかったです。

A B C D E

2 先生の話し方(言葉、声、話のスピードなど)は適切で、聞きやすく・理解しやすかったです。

A B C D E

3 各授業活動の時間配分は適切でした。

A B C D E

4 先生は私たちが質問や練習できるように考えてくれました。

A B C D E

5 先生は私たちの質問や意見をよく聞いて、答えてくれました。

A B C D E

6 ^{わたし}私^{しつもん}が^{こた}質問に^{とき}答えられない時、^{せんせい}先生は^{おし}やさしく^{おし}教えてくれました。

A B C D E

7 ^{せんせい}先生は^{げんき}元気に^{じゅぎょう}授業をしました。

A B C D E

8 ^{ふくしゅう}復習テストは^{こた}答えやすかったです。

A B C D E

II. ^{じゅぎょう}授業について、^{じゆう}ご自由^かに^{にほんご}書いてください。(日本語 / ^{ちゅうごくご}中国語 / ^{えいご}英語)

^{おも}いいと^{てん}思う点：

^{せんせい}先生へのアドバイス：

^{せんせい}先生へのメッセージ：

